
蒼い空、赤い花。

風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い空、赤い花。

【Nコード】

N2074I

【作者名】

風花

【あらすじ】

冷酷非情な皇子と、美しく勇ましい姫君。様々な人や国々の思惑が複雑に絡み合う中、その身が持つ宿命に二人は翻弄されながらも惹かれ合う。

遠く海を隔てた二つの国に生まれた男女の、不器用で愛しい恋物語。

序章

一人の女性が窓辺に佇んでいる。窓から吹き込んだ風が、長く艶やかな黒髪を揺らした。

「……………」

彼女は空を見上げて、そうしてふと微笑んで振り返る。

「いつになったらお声をかけて下さるのです？」

「……………気付いていたのか」

「当たり前です。妻たる者、夫の気配くらい悟れなくていかがいすか」

くすくす、と笑いながらそう言う彼女の視線の先には一人の男。開いた扉に寄りかかるようにして立っている。小さく息を吐いて柔らかく表情を崩した彼は、最愛の妻である彼女のもとへと歩み寄ってその肩を抱いた。

「窓から何を見ていたんだ？」

「空を……………ほら、」

「空？」

つい、と白い指先が指した窓の向こうには晴れ渡った青空。

「同じなのだと、思いました」

「ああ」

「あの城から見ていた空も、このように青く染まっておりますか

ら……」

異国の地でもこのような美しい青空が見られるなんて、思っておりませんでした。

そう笑った彼女を、彼は肩を抱く腕にそっと力を込めて引き寄せる。

「空というものは、どこまでも繋がっているものなのだそうだ。同じ、空が。……だから見上げる時はどんなに離れていても、繋がっている」

だから、寂しがる事は無い。そう続けようとした言葉は声になる前に飲み込まれた。

「では、過去や未来にまで繋がっているかもしれないね」

覚えていますか、と彼女は囁く。

「……何を？」

「私達が初めて出逢った時の事を、です」

「……忘れられると思うか？」

「いいえ、全く」

顔を見合わせて笑う。思えば、なんとも懐かしき日々。

「今夜は昔語りをするのでしょうか」

「ええ。そういたしましたよう」

そして二人は寄り添いあって、空を見上げた。

昔語りをしよう。

遠く海を隔てた二つの国に生まれた男女の、不器用で愛しい恋物語を。

全てが始まったその日も、空は蒼く、花は赤かった。

『蒼い空、赤い花。』

一、その始まり

その日、彼は大変不機嫌だった。ドスドスと足音も荒く、美しく磨かれた回廊を憤然と歩いていく一人の男。そんな彼を避けて、回廊の端で礼の形をとったまま通りゆく人々はびしりと固まる。

ちらりと見えたのは憤怒の表情。

いったい今度は何事だ、と内心呟きながらも決して目だけは合わせないように彼らは必死だった。

ばぁん！

凶悪な音をたてて扉が開いた。室内で目を丸くしている青年を後目に、室内に入ってきた男は後ろ手で乱暴に扉を閉める。

「……いますぐ私の荷をまとめろ」

「いきなり過ぎて、さすがに状況が掴めないのですが」

「遊学に行く。いますぐだ」

「……とりあえず何があつたんですか、昭義ショウギ」

秀麗な顔を怒りに染めて発した、あまりにも端的な言葉にかつてない彼の怒りを察して、その傍付きであり友人である青年は大きく息を吐いたのだった。

いま現在、怒りに顔を歪めている男。彼こそが晋国皇帝が第一皇子、

名を昭義という。世間一般に言わせれば、眉目秀麗な顔立ちに明晰な頭脳を兼ね備えた、まさに晋国を治めるに相応しい王位継承者である男。……なのだが、少しでも彼を知っている人間はそうは言わない。間違いなく最後に一言付け加えるだろう。性格に難あり、と。

「で、今日は陛下に何を言われたんです？」

「……」

「どうせあれでしょう、早く嫁を取れって」

「……何故わかる」

「あなたのそんな顔見てたら嫌でもわかりますって」

ぶすつとした顔のまま黙り込んだ昭義に、こぼこぽとお茶をいれてあげながら青年は溜め息を吐いた。

「白^{ハク}にはお見通しですよー」

「……嫌い」

「それで、おおかたブチ切れて手っ取り早く他国へと遊学に行くと宣言したんでしょう？」

自らを白と呼ぶ青年の言葉に、にやりと昭義の口角が上がる。

「残念ながら不正解だ、白。私を遊学に出すと言い出したのは我が父上だからな」

何がお見通しだ、と鼻で笑う昭義に驚愕を絵に描いたような顔をして白は呟く。

「なんでまた、陛下が……」

「若い頃に己も遊学に出て学んだのだと」

要は自身の目で世界の広さを見て来いという話らしい。なるほど、それは良い案だと白は思う。昭義は未来に皇帝となる身。その前に世界を見に行くというのは国の未来にとっても、昭義自身にとっても良い事だと素直に思った。実際、昭義自身も遊学には乗り気である。

そこまで考えて、はた、と白は気付いた。それならば何故こんなにも彼は不機嫌なのか。

「じゃあ何故そんなにも不機嫌なのですか」
「……」

途端にむすつと口を閉ざす彼に、白は首をひねる。口に出したくもないからみなまで悟れ、ということなのだろうか。後でこっそり調べておこうと決め、その件はとりあえず置いておく事にした。

「それで、行き先は？」
「…… 大海を越えて、日のいづる方の島国」

白は驚きに目を見開いた。あの荒い海を越えようなど、自殺行為に近い。

「本気ですか？」
「でなければ口になど出すまい」
「……まさかと思いますが、死ぬおつもりで？」
「そんな訳あるか、阿呆」
「では何故」

真剣な表情で問い詰めてくる白に、昭義はにやりと不遜に笑った。

「どうせなら、誰も見た事の無い物を見なければな」

まったく昭義らしい、と白は笑う。彼をよく知りもしない者達は命知らず、と罵るかもしれないが昭義が何か行動を起こす時には必ず裏にそれに見合うだけの理由があるのだ。

「……父上が、懇意にしている国があるらしくてな。どうもその国主、病を患っているらしい」

「病、ですか」

「重篤なものでも無いが、薬がいる」

「この国にあるので？」

「ああ」

「それで、見返りは何を？」

「……さすがだな、白」

満足げに笑う昭義に、白は疲れたように息を吐いた。

「あなたが見返りも無しに、このような行動をするとは思えませんから。ましてや人助けなんて……明日は空が落ちるかも」

「……いい度胸だ」

ちやきり、と腰に履いた刀に手をかけた昭義から笑いつつ、さりげなく距離をとる。下手したら本当に抜きかねない男である事を彼は長年の経験でよく知っている。しばらくそうやって二人して距離を計っていたが、今回は昭義の方が先に折れた。

「……宝がな、あるそうだ。その国が酷く大切にしている宝が」

「宝？……国宝？」

「赤く、世にも美しい花だと」
「花、ですか」

はて、と白は考える。どれほど美しい花であったとしても、いくらなんでもそれが国宝にはならないだろう。考えられるのは、異国の価値観の違いかもしくは別の意味合いを持つ隠語であるか。この場合は後者の可能性が高い。

「赤い花が示す、国宝……ねえ？」

「もうある程度の予測はついてるがな」

国宝となるものは大概が希少価値をもつ。世界広しと言えど、希少価値を持つものは少ない。赤色で希少価値を持つものを考えていけば、ある程度は候補は絞られてくる。

「鉱石か、もしくは丹か……」

赤色の鉱石が見つかる事自体が珍しいし、仙薬の材料でもある良質な丹はほぼ幻の存在に近い。もしもそれらが存在するとするならば、確実に国宝だろう。

「……まさかと思いますが昭義、あなたそれを要求するつもりじゃあないでしょうね」

「そのまさか、だ」

にやりと笑った昭義に、はあ、と白は額を片手で押さえて天井を仰ぐ。

「……国宝を、そう簡単に手放すとお思いで？」

「馬鹿を言つな。誰が手に入れたと言つた」

「へ………?」

「この目で拝ませてもらつただけだ。奪おうなど思つておらん」

「………本当に?」

「わざわざ海を越えてまで誰が戦の火種を撒くか、阿呆」

白は思わずその顔を凝視した。本当にこの友人は何を考えているかわからなくなる。

「しかし、海を越えてまで行く価値がありますか?命賭けで?」

「この国の誰も見たことの無いものを見に行く、と言つたらろ?」

国に閉じこもっているだけでは見えないものは山ほどある。外部へ、ましてや異国へと自由に見聞を広げる機会など昭義には滅多に無いのだ。そんな機会を得たのだから、どんな些細な事でもそれは彼にとって大きな価値を持つ。

「それらは必ずや私を伸ばす力になる。いずれ必ず、役に立つ時はやってくる」

書物は知識を与えてはくれるが、読む者に現実までは見せてくれない。人の上に立つ者が知らなければならぬのは理想論ではなく、現実なのだ。

「昭義………」

どんなにむちゃくちゃな事を言っていると思つても、彼はいつだって先の事を考えているのだと、白は胸が熱くなった。そしてそれは必ず未来に繋がっていく。昭義が帝位を継いだ未来の様子が、白には目に浮かぶようだった。

それに、と昭義は笑う。

「父上すらも見たことのない秘宝だぞ？私が見たとになれば、大層悔しがるに違いない。それだけでも見に行く価値は十分にあるというものだ。まあそれに……」

「？」

「欲しいと思ったのなら手に入れれば良い」

そう言った彼の顔は見事な悪人面で。

前言撤回。やっぱり昭義は昭義でしかないのだ、と白は再認識したのだった。

ひとしきり胸の中で昭義という人物を再認識した白は、そういえばと昭義に声をかける。

「白は連れて行ってもらえるんで？」

「あたりまえだろう」

即答されて、一瞬驚いたようにまばたきをする。そんな白の様子をちらりと見て、昭義は小さく息を吐いた。

「……お前以上に私を理解している者などいないだろうが」

「……はい」

につこりと破顔一笑。

『下を向くな、胸を張っている。お前は私が認めた傍付きであり友なのだから』

何度となく昭義に言われた言葉が白の中で響く。

「例え全てがあなたを疑おうとも、私だけはあなたを信じますよ。昭義」

「……だが、私が何かを見誤っていたらどうする？」

静かな問い掛けだった。くす、と白は笑う。

「殴りつけてでも正しい方向を向いてもらいます、もちろん」

「第一皇子を殴るか、傍付きが」

「ええ、だって」

友人ですからね。

白の言葉に昭義の口角が上がる。そして二人して顔を見合わせて笑った。

白は願う。昭義を『皇子』としてではなく、ただの『昭義』として見てくれる人間が増える事を。この国で彼を本当に理解している人間はほんの一握りしかない。それはそのまま昭義の孤独と繋がる。と、白は知っているから彼が彼を理解してくれる人間と出逢う事をただ願っているのだ。

「海の内側の国で、気の合う友人が出来るといいですね。昭義は友人が少ないんですから」「……その減らず口を閉じてさっさと仕事をしろ」

そして二人は明日、異国へと旅立つ。

十その始まり、了。

二、戦場の出逢い

「昭義はもう発ったのか」

「はい、今朝方早くに」

「……まったく、我が息子ながらせつかちな奴よ」

豪華な玉座に深く座りこみ、晋国皇帝である男は大きく息を吐いた。部下からの報告によると、この国の第一皇子は最小限の人数を伴っただけで海の方こうの異国へと旅立ったらしい。準備が早いのは良いことだが、行動を起こすのが早過ぎる。いったいどんな荒技を使つて、必要物資の入手や船の手配をしたのかと思うと頭が痛くなつた。

「心配なさらずとも大丈夫ですよ。まったく、こういう所はお若い頃の貴方様によく似ていらっしゃる」

「……まあ、あいつの方があの頃の私よりも頭が切れるからな」

昔からの臣下に言われ、思わず顔が緩む。久しく手合わせをしていないが、昭義は武術の腕もたつ。自身の身くらいは守れるはずだ。

「心配するだけ無駄というものか」

「貴方様の息子です、私は端から心配などいたしてはおりませぬよ」

それもそうだなと笑っていると、文を携えた臣下が入室してきた。

「それは？」

「海の方こう、ヒヤマ緋山の国より親書です」

「緋山から？」

つい先日、文のやりとりをしたばかりだというのにどうしたことが皇帝はいぶかしみながらも文書に目を通していき、そして溜め息を吐いた。

「皇帝？」

「……………どうにも間が悪いことだ」

無事に辿り着けばいいが、と呟いた声は小さく室内の空気に溶けた。

「……………ふえつくしゅ！」

静かな林の中に、盛大なくしゃみが響きわたる。

「誰かが噂でもしてるんですかねー、昭義」

「……………どうしてそこで私の身体の心配に繋げんのだ、お前は」

「いやですねえ、あなたがそう簡単に風邪なんてひくわけないじゃないですか」

ズズツと鼻を吸って、昭義は恨めしげに隣りの白を睨む。

「それに何故、こんな林の中を歩いていかねばならんだ！緋山の国の港に着くはずではなかったか！？」

「……………あの嵐で無事に陸地に辿り着けただけでも良しとして下さいよ」

はあ、と疲れたように息を吐く白の表情には呆れが滲んでいる。

出国してから順調に進んできた船旅もあと一日ほどで終わるとい
時にやってきた、大きな嵐。波は荒れ狂い、強烈な暴風雨が帆をむ
しり取った時には死を覚悟したものだ。そんな状況でも陸地に辿り
着けたのは、奇跡に近い。

「風でだいぶ北に流されましたから、現在地がはっきりしないんで
すよ。なんとか道が聞ければいいんですけど……」

そういつてぐるりと辺りを見渡すが、あるのは同じような木ばかり。
チチチチ、と雀の声がやけに耳についた。

「人里どころか、人に出逢えるかどうかすらわからんな」

「……やはり日頃の行いが悪かったんですかねえ」

ま、諦めてますけど。半ば自暴自棄な気分になりながら白は呟く。
歩き出そうとしたその肩を、昭義がぐっと掴んで押し留めた。

「昭義？」

「……」

無言で辺りに気を配る昭義の様子に、白も即座に辺りの気配を探っ
た。
どうやら相手も気付いたらしく、ひどく希薄な気配が遠ざかってい
く。

「いまのは……？」

「影と同じようなものだろう。この国の呼び方では忍シノビというらしい
が」

なるほど、忍ぶ者とはよく言ったものだ。白はもとより、人の気配に人一倍敏い さとい はずの昭義ですら、その接近に気付かなかった。

「我が国でいう影……つまりは隠密部隊ですか。いったい何用だったんでしょう?」

「……まあ、単純に考えて偵察だろうな」

ふむ、とほんの僅かの間考えて白は再び周囲の気配を探るが、もはや何の気配もない。

「気配を追えるかと思いましたが……駄目ですね」

「あたりまえだろう。とりあえず、即座に敵だと認定されなかったのが幸運だな」

「ええ、本当に」

でなければ殺されていたかもしれない。昭義も自分も、そう簡単に死ぬ程弱くはないけれどアレとは根本的な所が違う。

アレは『殺すモノ』だ。

一瞬、昭義の死という最悪の事態が頭をよぎって白は身震いした。

「やはり、武官を連れてくるべきでしたよ」

ぼつりと呟く。いま、この場にいるのは白と昭義の二人のみで、昭義を守る人間は白のみだ。それが酷く心細く感じられて仕方ない。自信が無いのだ。もしもの時は本当に、自分は昭義を守りきれのだろうか。

どこか沈んだ面持ちの白を見て、昭義は嘆息する。

「何言ってる。私の護衛はお前だけで十分だ」

そして何事も無かったかのように再び歩き出した。昭義の一言にしばし呆然としていた白だったが、我に返りその背を追って歩き出す。

「……あの、昭義？」

「なんだ」

「いまのはいったいどういう意味で……？」

「そのままの意味だが、それがどうした」

「……いえ、ありがとうございます」

変な奴だなとぼやく昭義の背を追いながら、白は思わず破顔する。昭義が無意識のうちに向けてくれる、絶対の信頼が嬉しかった。

「……自信が無いなんて、言ってもらえないじゃないですか」

信頼には信頼を。向けられた信頼に精一杯応えなければ、もはやこの身に意味はない。例え自信がなかるうと、そんなことはもう関係ないのだ。大切なのは、応える心。

自分だけが聞こえるくらいの小さな声でぼそりと呟いて、そして白は前を見据えて歩き出したのだった。

それは予感だった。

漠然とした、でも確信に近い予感。ざくざくと下草を踏み分けて、昭義は進む。見知らぬ土地であるのに、何故か迷うことはなかった。まるで何かに突き動かされるように、迷いもなく歩いていく。

予感がするのだ。この先で、出逢わなければいけない何かがある。そしてその予感は、その音を耳にした瞬間に昭義の中で確信へと変

わった。

「……これは、まさか」

「推測よりも確認が先だ。急ぐぞ」

その音が耳に届いた瞬間に顔色が変わった白を、置いていきかねない勢いで昭義は足早に歩き出す。歩く程に近くなっていく音。

ざんツ、と下草を踏み分けて林を抜けた先。小高い丘のようなその場所から眼下を見下ろせば、そこは戦場だった。

響き渡る怒号。剣戟、断末魔、法螺貝の音に馬のいななき。赤い鎧をまとった軍勢と黒い鎧をまとった軍勢がぶつかり合っている。土煙と血飛沫が舞う戦場を眼下に見下ろして、昭義と白はその表情を険しくした。

「やはり、戦でしたか」

なんて問の悪い。そう吐き捨てるように言った白の隣りで、昭義は冷静に戦況を分析していた。

「……そろそろ決着らしいな」

「そのようですね」

明らかに片方の軍勢が押されている。最前線はまだ粘っているようだが、もはや退却は間近だろう。そして上がる勝ち鬨 カチドキの声。どうやら軍配は赤揃えの軍勢に上がったようだった。

「さっきの忍は戦の為の偵察だったんですかねえ」

「たぶんな」

だとすれば殺しの専門だろうという予測は外れていない。おそらくは殺しと戦闘に特化した、戦忍 イクサシノビ だ。やはり敵認定されなくて良かった、と白は心底思った。

唐突に、ざわりと二人の首筋が粟立つ。

ひとつ息を吐いて振り向けば、黒い鎧をまとった男が数人、ぎらぎらとした目を向けていた。彼らから向けられているのはまごうことなく殺気。血油でべったりと汚れた刃を向けてじりじりと近づいてくる。

「なんか、近頃は災難続きですねえ。どうも」

「……残党か」

「でしょうね。おまけにあちらさん、負けたからか随分とまた気が立ってるみたいで」

とぼつちり喰らっちゃいましたねえ、なんて言っている白の目は笑っていない。ちゃきり、と腰にはいた剣の柄に手を添えた。じりじりと双方の距離が詰まる。両者がぐつと腰を落として、一気に距離を詰めようと足を踏み出したその時。

どこから飛来した矢が黒い鎧をまとった男達の一人の喉を射抜いた。

「そのまま動くな……！」

響いてきた怒号。そして間を置かずして飛来した矢が、次々と男達を貫いていく。目の前で血飛沫を上げて倒れていく男達を、身じろぎもせずに眺めていた二人に近づいてくる馬の蹄の音。おそらくは先ほどの声の主だろうが、二人は警戒を解く事はせずただその場で待つ。馬影が近付くにつれて見えてくる人物を見たたん、昭義も白も思わず驚きに目を見開いた。

単騎で駆けてきたその人物は、血飛沫の付いた赤の鎧をまとい、長い黒髪を高い位置でひとつに括った、顔立ちも美しい女武者。

「……無事か」

間に合って良かった、と僅かに微笑んだ彼女から昭義は目を離せなかった。

十戦場の出逢い、了。

三、紅姫

あの戦場での出来事から数日後、昭義達一行は緋山ヒヤマの国の城下町に辿り着いていた。

「なんだか、思った以上に早く到着しましたね」

賑やかな城下町をきよろきよろと見ながら、白が笑う。林から戦場に転がり出てしまった時にはどうなることかと思っただが、昭義達にとつてあの場に出てきたことは幸運へとつながった。

「……それにしても、まさか緋山の軍勢だったとは驚きでした」

「戦をしているという情報は無かったからな」

ある意味、さまざまな幸運が重なったといえるだろう。嵐に遭遇しなければ、昭義たちがあの場所に足を向ける事は無かっただろう。緋山の軍勢があので戦をしていなければ、土地勘の無い昭義たちは道に迷って、この城下町に辿り着くことは無かったかもしれない。そして戦があのに終わらなければ、昭義たちは訳もわからないままに巻き込まれて死んでいたかもしれない。そんな様々な偶然が重なって、今があるのだ。世の中とは不思議なものだと、柄にもなく昭義は思った。

わあっ、と城下町の民達からひととき大きな歓声があがる。

「紅姫さまあー！」

「おかえりなさいませ、姫様！」

「此度の勝ち戦、おめでとうございます！」

「べにひめさまー、おかえりなさい！」

声の上がつた方へ視線を向ければ、立派な軍馬にまたがったあの女武者が民に囲まれて悠々と道を進んでいた。

「すごい人気ですね、彼女」

「随分と名が通ってるようだな」

「まあ、だてに女性の身で隊を任されている訳じゃないでしょうか」

「まったく……いけ好かない女だ」

嫌そうにそう言った昭義を、白はムツとした表情で素早くたしなめる。

「何を言ってるんですか。私達は彼女に礼を言いこそすれ、そのよ
うな事を言える立場ではありませんからね！」

「聞こえなければいいのだ、聞こえなければな」

「まったく……彼女の何がそんなに気に入らないのか、白にはさっ
ぱりですよ！彼女がいろいろと手を回してくれたからこそ、我等は
こうして王命を果たせるというのに」

そう、昭義達が晋国シンコクからの使者であると知ってさまざまな手配をし
てくれたのは他ならぬ紅姫であった。

まったくの初対面から、彼女はなんとも強烈な印象を昭義に与えた。

『異国の者は礼儀を知らないのか』

ひとまずその場が落ち着いて、そして発した彼女の第一声がこのひとこと。さえざえと冷たい声音がやけに昭義の耳に残った。

はつきり言つて『皇子』である昭義が初対面の人物……ましてや女性にこのような言葉を投げつけられたことは、いまだかつて無い。一瞬あつけにとられそうになったものの、捨て置くにはあまりにも不愉快であつたために棘のある言葉を返す。

『礼儀も何も……助けを請うた覚えはない』

だから頭を下げて礼を言う必要性は無い、と言外に告げてやった。……告げてやったのだが、見事に鼻で笑われて不快指数が更に上がる。まるで独り相撲 ひとりずもう。

『それで、貴殿らは何者だ？異国の者とお見受けするが、その風貌……商人というわけではあるまい』

『人に尋ねる前に、己から名乗るのが礼儀というものではないのか？』

先の言葉を皮肉つてそう返してやれば、すうっと表情を消した彼女は改めて背筋を伸ばした。

『これは失礼致した。……緋山軍が騎馬隊長、紅と申す』

『……晋国皇帝が第一皇子、昭義。王命により緋山の国主への使者

として参った』

晋国、と昭義が口にした途端に紅と名乗る女武者の表情が僅かに変わった。自身が相對していた男が、自国にとつての重要人物と気付いたらしい。これでこの女武者の態度が豹変、謝罪を始めるだろう、と昭義は思ったが紅の次の発言はその予測の斜め上をいった。

『それで？』

『……は？』

『何故、その晋国の第一皇子殿がこのような場にいるのか教えて頂きたい。ここは緋山の居城からかなり離れているはずだが？』

うつ、と思わず言葉に詰まる。嵐に遭遇したせいで目的地から大幅にズレた場所に辿り着いたあげく、目的地までの道のりが分からなかったのでとりあえず人里を探していた、なんてどこか間抜けな事実を紅にそのまま伝えるのは昭義の自尊心 プライド が許せなかった。だが、下手に隠して国を探る目的かと疑われでもしたら今後の国交に影響をきたす。

どうしたものかと内心で葛藤を続ける昭義をちらりと見て、白はおずおずと昭義の傍らで声を上げた。

『…あの、よろしければ私が御説明させて頂いてよろしいですか？』

紅と昭義の二人から同時に視線を向けられて、白はへらりと笑う。

『……貴殿は？』

『昭義様の傍仕えをさせて頂いている、白と申します。……先ほどは昭義様が失礼をいたしました。代わって私が謝罪と、我等を助けたいいただきました御礼を申し上げます』

そう言つて深々と紅に向かつて頭を下げた白に、紅は険しかった目を僅かに和ませる。

『……頭を上げて下さらぬか、白殿。できればそちらの事情を教えてください』

先程とは随分と違った柔らかな声音に、白の表情も緩む。

『はい。ありがとうございます』

そして不機嫌そうな昭義をそのままに、白は今に至るまでの事情を簡潔に話したのだった。

『……それは難儀でありましたな。しかし、運が良かった』

『ええ、本当に』

事情はわかり申した、と紅はひとつ頷いて白に微笑みかける。そしてようやく昭義に向き直つた時には、再び無表情に戻っていた。

『ここで会つたも何かの縁。……我等が緋山の居城まで案内いたそう、第一皇子殿。貴殿らの使う馬の手配は勿論のこと、壊れた船の修理や必要物資などもこちらで手配させてもらうので安心してほしい』

『……礼を言つ』

しばしの間はあったものの、感謝の意を示した昭義に向かつてはじめて紅はその表情を緩める。

『我が殿の大切な客人だ。……そう簡単に無碍　むげ　には出来ぬよ』

そうひとこと言いおいて、不意に紅は視線を逸らす。その瞬間、かすかな気配が生じたのを昭義と白は感じ取った。

『……………弥太郎』

『は。ここに』

紅が名を呼んだその瞬間に、紅の馬の隣りに黒装束の男が一人現れる。昭義達が驚きで目を丸くしている間に、二人の会話はどんどん進んでいく。

『今の話、聞いておったな？』

『はい。既に部下達を手配にまわらせております。もうすぐ馬もこちらに到着するでしょう』

『そうか。馬が到着次第、本陣へと戻る。先触れを頼む』

『御意』

そして会話が終わると同時に、再び男は瞬時に姿を消したが今回は近くにかすかな気配を感じる。どうやら牽制　けんせい　の意味も含めての事らしい。

『……………失礼した。まもなく部下が馬を率いて到着する。その後、貴殿らには緋山の本陣まで同行してもらおうがよろしいか？』

改めて昭義へと向き合つと、紅はそう言った。良いも悪いも無いではないか、と内心思いながらも昭義は眉ひとつ動かさずに僅かに首肯する。

『承知した。……白』

『はい』

『船へ報せを』

『承知いたしました』

びい、と指笛を鳴らして鳥を呼ぶ。白は懐ふとろに入れてあつた携帯用の小筆で、紙にさらさらと何事かを書き付けると、あつという間にそれを鳥の足に括り付けて空へと放った。

その様子を紅が興味深げに見つめている事に気づき、くすりと白が笑う。

『この国では珍しいものでしたか？』

『いや……我等もよく使うのだが、少々意外だったゆえ』

はて、と紅の言葉に白は首を傾げる。するとその時、地響きと共に数騎の馬影が三人の視界に入った。

『姫様ー！』

自身が乗った馬とは別に二頭の馬を連れてきた初老の男は、そう叫んでいた。

『なに？……姫？』

訝しげに昭義が呟くのをよそに、紅は片手を上げて笑顔で男に応える。

『ああ、ここだ！御苦労だったな』

『御苦労だったな、ではありませぬ！あれほど単騎になられるなど』

申し上げたではありませんか！』

ガカツ、と紅の目の前で馬を止めた男は目をつり上げて怒鳴る。

『弥太郎が付いている。問題は無かる』

『そういう問題ではありませんか！だいたい姫様はいつもいつも、』

『……もうその辺にしてくれ。客人の前だ』

『客人……？ややつ！こ、これは失礼を致した！』

紅のその言葉に、ようやく男は昭義達の存在を認識したようだった。

『……それで？“姫”というのは？』

どういふ事だ、と昭義は冷たい視線を紅へと向ける。ちツと小さく舌打ちの音が紅から聞こえたような気がして、白は思わず耳を疑った。紅は思わぬ事態に片手で額を抑えて空を仰ぐ。その場に流れる微妙な空気を知ってか知らずか、男は笑顔で口を開いた。

『“緋山の紅姫”……その数々の武功から、戦場ではそのように呼ばれておるのです！』

さすがは我等が姫様！とにこにこ笑う男とは逆に、昭義の機嫌が急下降していくのが分かって白は冷や汗をかく。

『つまり“紅”というのは“通り名”とやらか』

紅は何も言わず、ただひとつ大きいため息を吐く。それこそが昭義の言葉が真実そうであるという事実を、はっきりと伝えていた。

『気に入らん。何故、通り名を名乗った？』

『……名は、名だろっ？』

『名乗れ』

『断る』

はつきりと拒絶の意を示した彼女に、昭義は氷のような冷たい視線を向ける。彼女はその視線を真正面から受けて、そして。

『誰が相手であろうとも、私は意に沿わぬ相手に名乗るつもりはないのだ。晋国の皇子よ』

美しく、酷く艶やかに昭義へ向かって微笑んだ。

その美しさに、まるであてられでもしたかのように昭義は言葉を無くして息を呑む。

『……私に名乗らせたいのならば、黙って付いて参るが良いぞ。道中いずれかは気が変わるかもしれぬ』

くすりと笑って、そうして踵かかとを返して馬を歩ませ始めた彼女……紅姫の背を昭義はただ見つめるしかできなかった。

そんな経緯があつて現在に至つたためか、昭義はひとり悶々（もんもん）とした思いを抱えていた。

彼女……紅姫と会話を交わしたあの時の事を考えると、酷くもやもやとした気分でいっぱいになる。あの時の事をほんの少しでも思い

出すだけで、不愉快で屈辱感すら覚えるのに、何故かもっと知りた
いとも思っただ。不思議と彼女の本質はもっと深いところにあると
いう確信もある。まだまだ知らない彼女が隠されているのだ、と。
そんな気がして仕方がない。

「……………気にくわん」

気付けば紅姫の事ばかりを考えている自分がいることを自覚して、
そしてため息を吐いた。

緋山の城門は、もう目の前まで迫っている。

十紅姫、了。

四、宴席にて酒を飲むこと

夜の中、煌々と火が焚かれた城の一室から人々の楽しげな声が響く。がやがやとしたざわめきの中、昭義は手にした杯の酒をぐいっと飲み干した。

「おお、良いのみつぷりじゃのう昭義殿。ささ、もう一杯」

「ありがとうございます。……しかし、お身体は大丈夫ですか？ 忠信 タダノブ 殿」

「なあに、心配は無用。遠く海を越えて友の息子が来てくれたという日に、床になど臥せってはいられまいよ」

昭義の隣りに座した、少しやつれた顔で笑うその男こそが、緋山ヒヤヤマの国主。その名を忠信タダノブという。彼は昭義達の突然の報国にも関わらず、歓迎の意を示し、そして遊学としての滞在を許可したのだった。そして今夜は、昭義達の歓迎の宴である。

「貴重な薬、そして薬師まで遣わせていただいた恩……この緋山忠信、忘れは致しませぬぞ」

「それはどうぞ、我が父に……心配で仕方なかったようですから」

そうか、と笑った顔がひどく穏やかで昭義は何故だか父を思い出した。今の忠信と同じような表情で空を見上げている父の姿を、幼い頃から何度となく見ていたがそれはきつと、海の向こうにいる友を思っただ事だったのだろう。でなければ、遊学などと言って昭義を送り出す事などしない。

「お互い、不器用だからのう……信頼も心配もこのような形でしか

伝えられぬのだ」

ぐい、と自らの杯を空けて忠信は笑う。なんとなく、忠信との事を尋ねれば父もきつと同じような事を言うのだらうと昭義は思った。

ざわり、と宴席が不意にざわめく。不審に思った昭義が視線を巡らすと、宴席の一番奥……廊下に通じる襖ふすまがすうっと音も無く開いた。そして現れたのは、美しい姫。その顔を見た瞬間、昭義は思わず固まった。

「おお、ようやく来たか」

「……遅くなりまして申し訳ありません」

背に流された長い艶やかな黒髪。白い肌に、ほんのりとさされた頬紅。美しい大振りの花が刺繍された鮮やかな赤の打掛を纏った彼女は、部屋中の視線を一身に集めてまっすぐに上座へと歩んでゆく。

これほどまでに美しい姫君を、いまだかつて見たことが無い……と昭義は思ったのだがしかし、彼女の顔にははつきりと覚えがあった。まさか、と少し離れた場所で緋山の臣下達と杯を交わしていた白を見れば、返ってくる困惑の瞳。やはり白も気付いたようだ。

そんな二人を後目に、彼女はするすると優雅に忠信の前までやってくると、謝罪の言葉と共にかるく頭を下げる。

「少々支度到手間取りまして」

「ははは、良い良い！女子の支度に時間がかかるのは皆の知るところぞ。気にすることはあるまい」

「ありがとうございます、父上」

呆然と二人の様子を見ている昭義の視線に気付くと、忠信はにかりと笑った。

「紹介がまだでしたな。儂の一人娘で、名を巴ともえと申す。巴、こちらは晋国の第一皇子、昭義殿だ」

つい、と背筋を伸ばして正面に座した彼女は艶やかな笑みを唇に乗せて、昭義を見据える。

「お初にお目にかかります。……緋山忠信が娘、巴にございます。どうぞよしなに」

すらすらと言葉を紡いだその声にも、確かに聞き覚えがあつて。

「“緋山の紅姫”、か」
「いかにも」

愉しげに口角を上げた彼女の表情は、確かに戦場で会ったあの“紅姫”のものだった。

『御客人のお相手は私に任せて、父上はそろそろお休み下さいな』
にっこりと笑った彼女がそう言って酒の入った銚子ちょうしを手に、昭義の隣りへ腰を下ろしたのは少し前のこと。

「……」
「……」

何を言うか決めかねて、その間昭義は無言で酒を煽るだけだ。周り

の賑やかな声も、二人の間にだけは届かない。奇妙な沈黙がその場を支配していた。

「……それで、どういづつもりだ」
「はい？」

くいつと空けた杯に、すぐさま酒が注がれる。ようやく沈黙を破った昭義は、杯の中で揺れる水面に視線を落としたまま、言葉が続ける。

「国主の姫君が、戦場に何の用だ」
「……何の話でございましょうか」
「とぼけるな。何故、戦に出る？自分の身分をわきまえているのか？」

ふう、と長く息を吐いて視線を上げれば、強い瞳が昭義を見つめていた。

「何を言われるかと思えば……身分など、それこそ関係ありません。むしろ、上に立つ者こそ先陣にて敵に毅然と対峙すべきでは？」
「たしかに男ならばな。……紅姫、いや巴姫。女子であるそなたの仕事はもつと別にあるはずだろう？」

戦や政は男の仕事で、女は護るべき対象。それが昭義には当たり前だったし、それ以外など彼には無かったから、その言葉はごく何気

ないものである筈だった。
しかし。

「……女の身である事の、何が悪いのですか」

ぽつり、と呟かれた言葉。彼女の瞳は怒り……否、憤りに燃えていて。その眼光のあまりの激しさに、昭義は目を見開く。

「女の仕事って何です？家の為に嫁いで世継ぎを生むこと？誰がつ、そんなことを決めましたの？」

静かに、しかしまるで炎の如く激した感情をこらえるように巴は一気にまくしたてる。

「それが世間一般の常識であると言われても、とても納得できるものではありません。そんなもの、私には知った事ではございませんわ！」

ぽかん、と自身を見つめる昭義のことなど忘れ去ってしまったかのように、手酌で満たした杯を一気にあおると、巴はそのままふいと顔を逸らした。

「……どうも今宵は酒が過ぎたようです。酒に酔ったの戯れ言とお忘れ下さい」

御前を失礼いたします、と巴はそのまま宴席を後にし、ただ昭義だけがその場に残されたのだった。

「……ちよつと昭義、あなた何を言ったんです？」

しばらく呆然としていた昭義の元に、にじりよつた白は開口一番そう言った。

「退室なさつた姫様、なんだか様子がおかしかったように思いました……それは白の気のせいではありませんよね？」

「……」
「ちなみに、無言は肯定とみなします」

何も答えようとしない昭義にピシヤリとそう言うと、白は手にした空の杯になみなみと酒を注いだ。反応のない昭義の手にそれを押しつけると、まるで条件反射のように杯をぐいっとおおる。

「……わからぬ」

ぼんやりとした目で呟いた昭義の隣りで、白は何も言わずに酒を注いだ。

「どうも腑に落ちないことが多すぎる。……何故、自ら戦場に飛び込もうとする？女子であるのだ、護られるべき存在はずだろう？」

「……」
「わからぬのだ、白」

まるで弱音のようにこぼれた言葉は、静かに昭義の中に満ちていく。酒が入っているとはいえ、こんなにも誰かの事を考えてこんでしまつのは初めての経験だった。

「……あのですね、昭義。わからなくて当然なんです。そんなすぐ

に誰かを理解できる訳ないじゃないですか」

これは友としての言葉ですが、と白は前置きして穏やかに言葉を紡ぐ。

「人間ってみんなひとりひとり違うんですよ。もちろん考え方で、違います」

「それはそうだろう？」

「だから、わからないのは当然なんです。自分とは違うんですから、他人がその人の全てを理解するなんてできるわけないですよ」

おそらく白の言葉の理解に苦しんでいるだろう昭義に、白はふっと笑った。

「それなのに“わからない”ともやもやするのは、あなたが彼女の事を“知りたい”“理解したい”と思ってるからですよ、昭義」

「……ただ気になるだけだ」

「同じことでしょう。ついでに、あなたが誰かの事をそんなに気にするなんて今までに無いんですから」

むう、と変な声をあげて難しい顔をする昭義に白は苦笑する。素直に認めてしまったほうが楽なのに、という呟きは胸の内にしまっておいた。

「慌てなくてもいいんです。少しずつ、知っていったら良いじゃないですか。“紅姫”である彼女も、“国主の姫君”である彼女も」

全く別の側面を持つ彼女を理解する事は難しいだろう、と感じているながらも昭義ならばと白は思う。難しいことはわからないが、傍目にも彼女は何かを抱えているようだ。白にはその姿が“皇子”である昭義に被って見えた。

それに……なんとなく彼女なら、昭義を理解してくれそうな気がしたのだ。長年探していた、白の願いを叶えてくれる人。

「……あなたの心に少しでも引っかかったものは、決して素通りしないことです。それはきつと昭義、あなたにとって大きな意味を持つものだから」

反応を返さない昭義だが、ちゃんと自分の言葉を聞いてくれていることは知っていたので、それ以上は特に気にすることもなく白も酒をあおったのだった。

十宴席にて酒を飲むこと、了。

五、朝靄の中で

宴の翌朝、普段よりも随分と早い時間に昭義は目を覚ました。再び眠ろつかとも思ったがどうにも眠れず、手早く身支度みじたくを整えて室を出る。流石に日の出前では城の中も静まり返っていて、下働きの者達もまだあまり起き出していないようだった。

室から一歩出れば朝の空気は身を刺すように冷たく、吐いた息は白くこごり、深く息を吸えばひんやりとしたものが体を満たしていく。それはまるで身の内でこごっていた何か^が浄化されていくようで、昭義は顔を僅かに綻ばせた。

せつかなのだからもう少し朝の空気を楽しもう、と縁側から庭園へと降りる。ひとすじ、吹き抜けた風が庭園の木々をざわりと揺らした。朝靄あさかりに霞やせんだ庭園は、日の光が照らす昼間とは違い、どこか幽玄の美を感じられる。晋シンの国にある自身が暮らす城の庭園も美しかったが、どこか儂げな美しさを持つこの国独特の庭園もまた素晴らしい。季節の花を眺めながら、広い庭園をぶらぶらと歩く。

と、ある場所まで来たときに微かに風を切るような音が昭義の耳に届いた。

「はっ！……やあっ！……」

短い気合いの声と共に振るわれる長い棒が朝の空気を切り裂く。

「……………あれは、巴姫？」

思いがけない人物に昭義は思わず気配を殺し、木陰に身を潜めて様子を見つめた。

朝靄の中、一心不乱に棒を振るう巴はまるで舞を舞っているかのよう
に軽やかに動く。ひとつに括られた長い髪がその動きに合わせて
動くさまは、まるで意思を持って彼女を追いかける別の生き物のよ
うだ。

裂帛れっぱくの気合いに満ちた表情。

昨夜の宴で昭義の目の前に現れた“巴姫”とは違う、“緋山の紅姫”
が確かにそこにいた。

「……………何の御用にございますか、第一皇子殿」

気付けば巴は動きを止めて昭義をまっすぐに見つめていて、その視線
を受けた昭義は木陰から姿を現す。どうやら最初から気付かれて
いたらしい。

「朝から一人で鍛錬とは、ずいぶんと熱心なものだな」

「……………私も、武人でありますゆえ」

そっけなく顔を背けてそう告げる彼女の冷たい反応が昭義には新鮮
で、おもわず小さく笑った。

「何がおもしろいのですか」

「いや、そなたのような女子は初めてだと思ってな」

「……戦女いくらめいは珍しゅうございましょう？」

「まあ、確かにそなたのような姫君はめったにおるまい」

そう言つて昭義は再び破顔する。白以外の相手でここまで愉快的気分になることは、覚えている限りではいままでに無い。巴はその様をちらりと見て、内心複雑そうな様子で口を開いた。

「……誉め言葉として受け取っておきますわ」

「ぜひそうしてくれ」

昨夜の宴の最中のやりとりが嘘のように、この時の二人の間に流れる空気は穏やかなものだった。

「しかし、やはり解せぬ」

不意に昭義は呟くように言った。

「戦場に出たところでまさか前線に立つ訳でもないだろうに、そのように気を張る必要があるのか？ある程度の護身が身に付けば十分である」

まるで当たり前だと言わんばかりの昭義の言葉に、巴は心が冷めていくのを感じる。言った本人は露とも気付いていないだろうが、その言葉は彼女を侮辱するも同じだ。

「……何故、そのように仰るのですか」

「何故とは……普通はそうであろう？ 女子が戦の最前線に立つなど、到底無理な話だ」

女は弱く、小賢しい。少なくとも昭義の周囲にいた女達は皆、そうだった。何かを手に入れたい時、男のように腕力にものをいわせるようなことができない分、自身の持つ武器はなんでも使っていた。それはある時は権力だったり、またある時には磨き抜かれた美貌や魅惑的な身体だったりした。“第一皇子”の妻という枠に収まるべく、それこそありとあらゆる手段で取り入ろうとする女達が昭義は幼い頃から嫌いであった。本来は護衛官であった白を傍仕えとしたのも、その事に起因している。

「解らぬのだ……何故そなたはその身を危険に晒してまで戦場に立つのか」

昭義の言葉に何気なく顔を上げた巴は、その瞬間の彼の表情を見なければ良かったと思った。

心底困惑したといった感じの、その表情を。

「……手合わせを、致しませぬか」

気付けば、そんな言葉を巴は口にしていた。

「手合わせ？」

「ええ。言葉よりも体感する方が解りやすい事もございましょう？ 百聞は一見に如かず、ですよ。第一皇子殿」

「……いいだろう、受けて立つ」

どこか挑発的な笑みを口元に浮かべた巴に、二つ返事で昭義は返答

を返した。普段なら女子など興味が無いため相手にもしないのだが、何故かこの異国の姫君にだけは惹かれてしまう。知りたい、と思っ
てしまうゆえの言動なのだと昭義も自覚していた。

「では時を改め、朝餉の後に道場にて。部屋まで迎えをやりましょ
う」

「あいわかった」

では後ほど、と背を向けた巴を見つめる昭義はどこか愉しげな笑み
を浮かべて彼女を見送ったのだった。

十朝霞の中で、了。

六、姫と手合わせすること

「本当にやるつもりですか、昭義」

手早く昭義の身支度みじたくを整えながら、白は嘆息する。

「……相手は女性で、しかも一国の姫君ですよ？ちゃんと手加減してあげて下さいね」

白の言葉を昭義は鼻で笑う。

「誘ってきたのは向こうだ」

だから問題ないと言い切る目の前の男に、頭痛がしてきそうだ。

「だいたい、軽い気持ちで手加減するのは相手に対する無礼だろう」

お前も剣を握る人間ならわかるだろうかと呟く昭義に、白は頷く。それは無礼を通り越してもはや屈辱だ。武人としての誇りを傷付けるのは、そう簡単に許されることではない。

「……どんな相手だろうと、見くびらずに正面から向き合う。それが礼儀だ」

「ええ。確かにその通りです。女性であろうと彼女も武人……！ けっして見くびっていた訳ではありませんでしたが、先程の発言は失言でしたね。すみません」

最後の仕上げにと腰帯を締め、愛用の剣を履く。

「まあそれに……勝負を挑んできた時点で、男も女も関係なくなるがな」

にやりと人の悪そうな笑みを浮かべた昭義に、白の血の気が引いた。まさかとは思うが、女が手合わせの相手であろうと本当に情け容赦無くやり合っつもりなのか。確かに手加減は無礼だとは言ったが、それでも相手は女性である。手加減にならない程度の配慮は必要はずだ。

「何故あなたはこういう時に限って男女平等精神になるんです！？ ちょ、待ちなさい！ 昭義！」

言うだけ言ってさっさと部屋を出た昭義を、白は必死で追いかけていった。

待ち受けていた案内人に導かれるままに辿り着いた鍛錬場には、すでに見物人が集まっていた。

「まるで見せ物小屋だな」

「異国からの客人と刀を交えるなど、滅多にあることでもありませんぬゆえ」

向き合う白は槍とよく似た得物を携え、くすりと微笑んだ。これだけの視線に晒されているにも関わらず、その様子に緊張の色は見え

ない。

「……余裕、か」

「これでも場数は踏んでおりますので」

さすがは緋山の紅姫といったところか。内心、関心しながら昭義も口の端を上げた。

「さて、そろそろ始めましょうか」

ひゅん、と空を切る音をさせて巴は得物を構えた。途端にその場が静まり返る。口調と共に、彼女の纏う空気が『巴』から『緋山の紅姫』に変わったのがわかった。悪寒にも似た感覚が背に走るのを感じて、昭義も鞘から剣を抜き放つ。手合わせでこんなにも気分が高揚するのは、本当に久しぶりだ。

「勝敗はどう決める？」

「そんなもの、状況が決めるでしょう。……手加減は一切無用」

「無論、手加減などするつもりは毛頭ない」

あたりまえだと言わんばかりに言い切る昭義に、巴は一瞬驚いたように目をみはらせて、そして艶やかに笑った。そうではなくては面白くもない。

「いざ、尋常に勝負」

踏み込みは同時だった。

しん、とその場から音が消えた。
自身の荒い呼吸音だけがイヤに耳に響く。自身が膝をつき、目の前に鋭い刃を突きつけられている現実が信じられなかった。

「勝負あったわ」

喉元に突きつけられた刃の向こう、見上げるようにして睨んだ先に艶やかな笑顔がある。思い掛けない事態の顛末てんまつに、昭義は舌打ちをしたくなった。

「……嘘でしょう？」

見物人に混じって手合わせの様子を見ていた白は、呆然と呟いた。
常識外れもいいところだ。本来ならこんな結果を予想など出来るはずもない。しかし、巴姫に示された力の差は実に圧倒的だった。まさか、数合打ち合っただけで昭義が負けるとは。

「悔しそうね、第一皇子殿」

「……紅姫の通り名は伊達じゃないということはよくわかった」

「それは良かったわ」

にこりと笑って、巴は刃を引く。それを受けて昭義もゆっくりと立ち上がった。

「それほどの腕前を、どこで身につけた？」

「……それ、知ってどうするの？」

「別に、興味をひかれただけだ」

つうつと愛おしそうに指で得物を撫でる。しかしその目は強い光を

宿して、昭義を見据えている。

「戦場で。そう言えば満足かしら？」

「……」

「女だからと言って下に見るのは、これっきりにして頂きたいわ」

そう言っつて踵を返した巴の後ろ姿を、昭義は黙って見送るしかなかった。

巴の姿が見えなくなったところで、昭義は知らず詰めていた息を吐いた。

途端に上がる、野太い笑い声。

「派手にやられましたなあ、客人！」

一気に不機嫌になった昭義を囲んで口々に男たちが言う。

「はっ、……貴様等にとってはいい気味だろう？」

「いやいや、ここにいる男共は全員が客人と同じだよ」

それはどうということだと昭義は眉間に皺を寄せた。

「つまりはみーんな姫様と勝負して、負けたって訳だよ！」

「は……？」

だから貴方も仲間だと笑う彼らに昭義も白も表情が固まる。

「……それは、いったいどういう事です？」

恐る恐る白が尋ねれば、幾分か罰が悪そうな顔で武将らしき男が頭を掻いた。

「いや儂らも皆、姫様が戦に出るのに渋い顔をしてたのでございませう」

「か弱い女の身で何を、と鼻で笑っておりますなあ」

「一国の姫君が戦に出るなど、愚かであるとしか思っていなかったのでございますよ」

「そうしたらそれが姫様の逆鱗に触れましたな！」

「城内の男は足軽も武将も皆、打ち負かされたというわけです」

だからある意味我らは同朋ですなあ。

そう言って笑う彼らに、昭義も白も呆然とするのだった。

聞けば、ある日とうとう怒髪天を突いた巴は緋山の全軍に対して宣言布告。

『私がある方全員に真剣勝負して勝ったら、今までの言葉を撤回して頂きます』

女は弱く、守られるもの。戦に出るなど、女に出来るはずもない。ましてや一国の姫に。

『女だから、なんだと言うのですか。私が姫だから、なんだと言うのですか』

あの細腕で男達をなぎ倒し、傷だらけになりながら叫んでいた。

『この手でこの国を守りたいと思って、何が悪いのですか!』

そうして打ち負かされた男達が屍をいっていると、城内の至るところに転がる中で彼女は高らかに宣言した。

『女だからと馬鹿にするは、私に勝つてからになさい。女だからとて、男に劣る事など何も無い!』

そうして彼女の素晴らしい戦働きにより、現在に至るまでこの緋山は守られているのだ。『緋山の紅姫』とその名を他国まで轟かせてまで。

「だから、この城の人間は姫様に頭が上がらない」

「女の身で逆風の中、様々な苦勞をなさりながら、この国を姫様が守って下さっている事を我らはもう知っているのです」

そう言ってどこか嬉しげに笑った彼等に、昭義も白もその双眸そめつばを弛ませたのだった。

十姫と手合わせすること、了。

七、鍛錬、そして対話

あの手合わせの後から、昭義の周囲は劇的な変化を見せた。いままではどこかよそよそしかった城の人間達が、昭義含む晋国の使節団全員に対してやけに親しげになったのだ。

「おうい、昭義殿！御一緒に鍛錬は如何か？」

「異国の剣術を教えて下され！」

ははは。いや、遠慮する。

本日何度目かの鍛錬の誘いに、乾いた笑みを昭義は返す。ちなみに、誘ってきた人物は同一人物ではない。あまりにも同じやりとりを繰り返したために、時には冷たくあしらう事もあったのだが。

『……悪いが、客といえど暇では無い』

『おお、それはお忙しいところを失礼致した！ではまた日を改めてお誘い致すことにしましょう！』

皆、そう言つて爽やかに笑うのだから仕方ない。……緋山の人間は、とても肯定的な考えの者が多いらしい。だが、それもまた昭義にとつては新鮮なことだった。

「それで？また鍛錬ですか」

「……」

「いい加減、衣をびしょびしょに濡らして帰ってくるのは止めて下さいって言いましたよね」

「……鍛錬の、結果だ」

「いったいぜんたいどんな鍛錬の仕方をしてるんですか！違うでしょ！白は知ってるんですからね、今日も井戸で水浴びしましたよねえ昭義」

「……見てたならそう言えばいいものを」

「……ちよつとそこに座りなさい昭義。あなたとはいろいろ話し合わなければいけないようです」

ちよいちよいと目の前の畳を指し示せば、むつつりとした表情をしながらも昭義は大人しくそこに座る。ここ数日、何度も繰り返しているこの光景に慣れてしまいそうで、白は小さく溜め息を吐いた。

この国へ来て良かった。

白は心からそう思う。この国で出逢った人々の、なんと心優しいことか。権力に媚びず、身分に縛られず、たとえ生きる国が違えども皆が同じく人間だと実感できる。ちゃんとした“ヒト”として扱ってくれる。……嬉しかった。

「あなたの気持ちはわかります。……ここにはあなたを“皇子”として扱う人はいませんからね」

“皇子”としてではなく、“昭義”として接してくる人々。自分たちも姫に負けたから同じだと、鍛錬に誘ってくれることが単純に嬉しかった。いつだって、その笑顔に裏は無かったから。そんな日常を夢見ていたから。

しかし。

「ですけど、鍛錬に行く度に衣をびしょびしょに濡らして帰ってくるのは止めて下さい！この衣を一枚仕立て上げるのにどれだけ金かけてると思っただけですか！？」

「ただの水だぞ？」

「そうですね、上衣を脱いで浴びるのはまだ良いです。百歩譲って水に濡らしてもいいです。ですけど、その後に地面に引きずって歩くから裾が泥だらけなんですよ！！ほらっ！！！」

おそらくは共に鍛錬をしている男達に教えてもらったのだろう、鍛錬後の井戸での水浴び。肩から脱ぎ落とした上衣の裾を腰紐で留めて頭から水を被るのだが、昭義は上手く裾が留められずに地面に引きずっているのだ。

「鍛錬するのを止めるなんて言いませんから、せめて裾を引きずらないようにして下さい」

そして、その泥だらけになった衣を洗うのは白であったりする。高価な衣を捨てる事など、とてもじゃないが白には出来ない。本国に帰った時に皇族の財務を扱う者に何を言われるかと思うと、胃が痛む気がする。

「……努力する」

「ありがとうございます」

白の悲痛な心境を察したのだろう昭義が、殊勝な面持ちで頷いて、

白も頭を垂れた。

くすくすくす。

不意に聞こえた笑い声に、ぴくりと昭義の肩が揺れた。

「紅姫か」

「ふふ、すみませぬ。お二人の会話があまりにも楽しげでしたので」

障子の影から姿を表した巴は、艶やかな刺繍の施された姫装束をまとっている。

「何用だ」

「まあ、ずいぶんな歓迎ですこと」

昭義の不躰ぶしつせなもの言いにも関わらず、巴は楽しげに笑った。

「失礼致しました、どうぞ此方へ。いま茶をお持ち致します」

「いえ白殿、お気になさらず。長居する用ではありませんので」

恐縮する白の申し出をやんわりと断り、巴は優雅な所作で畳に座った。

「近頃、我が臣下の者達があなた様に鍛錬をつけていただいているとか。……まこと、有り難きことです。かたじけのうございます」
「……何の話かわからんな。ただ、誘われたから共に鍛錬をしただけだ」

深々と頭を下げる巴に、内心驚きつつも昭義は答える。

「本来ならば、将である私がしなければならぬことではありませんが、私も政務に追われる身……。あなた様のような強いお方から御指南いただいている事実、臣下一同感謝の念を抱いております。無論、父も私も」

「私よりもそなたの方が強い」

「運が良かっただけにございます」

「……あれを運で済みますか」

嫌味が。

にこやかに断言する巴に、昭義はそう思った。

「……悔しかったですか？」

少しの沈黙がおちた後に、不意に巴はそう問い掛けた。

「私も、悔しかったです」

「……何がだ。あの時、そなたは勝者だっただろう」

「悔しかったのですよ。女と侮られる（あなどられる）ことが」

“姫”だから。“女”だから。そうやって、相手はいつも巴を侮る。その言葉を聞いた途端、白はその場にひれ伏した。

「申し訳ありません。……ですが、」

「わかっております。……どうか、頭を上げて下さいませ。白殿は、私を心配して言って下さっていたのですよね。それは十分に理解しております」

ふう、とひとつ小さな溜め息を吐いて巴は微笑んだ。

「白殿は、お優しい方ですね。あの折は私の心配をして下さって、ありがとうございますでした」

「……嫌味にしか聞こえんぞ」

「悔しくは思いましたが、心配して下さる事を嬉しく思わないはずもありませんぬ！……決して嫌味で言った訳ではございませんぬよ」

そう言って、困ったような顔で念押ししてくる巴に、白はほっとしたように微笑んだ。

「あなた様は、いままで会った男の方と違って私を侮ることはなさいませんでした。遠慮もなく、手加減もなく、私と向き合ってくださった……嬉しかったです」

ありがとうございますと微笑んで、巴は静かに頭を下げた。そんな巴を昭義は驚いたように見つめて、そして穏やかに微笑む。

「……そうか」

頭を上げてくれ、と呟くように言った声はそのまま白が聞いた事も無い程に優しい声音だった。

「あの、それでもし良ければ……私に少しお時間を頂けないでしょうか？」

「……鍛錬、か？」

僅かに頬を染めて問う巴に、訝しげな顔で昭義は首を傾げる。
いくらなんでもそれは違う、とうなだれた白に構わず二人は話を続ける。

「いえ、それもとて魅力的なのですが今回は違います。……城下には下りられた事はありませんね？」

「ああ」

「もしよろしければ、私に城下の案内をさせて頂けませぬか？……せつかく来て下さったのですから、この国をもっと知っていただきたいのです」

それは昭義にとって願ってもないことだった。かねてより、異国の民の暮らしぶりをこの目で見たいと考えていたため、二つ返事で承知した。

「ですが、よろしいのですか？お忙しいのでは……？」

「良いですよ、白殿。我が臣下に御指南いただいている礼代わりです」

ふん、と昭義が軽く鼻で笑った。

「安いものだな」

「あなた様にとっては金や玉よりもよほど良いものかと」

当たり前でしょう？

いたずらっぽく問うて、巴は腰を上げる。

「では明日、また」

「ああ。承知した」

簡単なやり取りの後、静かに巴は退室した。衣擦れの音が遠ざかる。

「……明日は、鍛錬はなしですね」

「ああ」

少しだけ、何かが変わり始めているようだった。

十鍛錬、そして対話、了。

八、つかの間の自由

雲一つ無い、青空が広がっている。天気の良い日には朝から商人達がさまざまな品物を大通りに並べ、それを買いに来る人々によって町はにわかには活気付く。そんなわいわいと賑わう大通りを、昭義と巴は連れ立って歩いていった。

「随分と活気があるな」

「今日は大通りに市がたつていますから、普段よりもやや人が多いですがだいたいいつもこのようなものですよ？」

昭義はもの珍しそうに周囲を見渡し、巴は一步後ろからその背中をどこか楽しいげに眺めている。遠い海を隔てた異国からやってきた皇子が、このように好奇心をあらわにしている姿を見せるとは思ってもみなかった。あれはなんだ、これは何に使うのか。城下に降りた途端に重ねられた問いかけ。教えてやれば、彼は普段のそっけなさや嘘のように素直に感想を述べる。それがとても可愛らしく思えて、巴は自身の中の昭義に対する印象を書き換えた。なんだか彼は、今まで出会った殿方達とは根本的に違うのだ。

「あれに売られているものは何だ？」

「ああ、あれは紅貝ベにがいですわ」

「紅貝？」

昭義の視線の先には、旅商人の広げた敷布に転がる小さな合わせ貝。

「おや、お目が高い。これに興味がおありでございますか？」

「ええ。少し見せていただけませんかしら」

「もちろん、喜んで！今回は随分と上質なものが入りましたんで……」

巴は柔らかな笑みをこぼして、商人から差し出された貝に手を伸ばす。手の中でわずかにひねれば、合わせ貝が滑らかに開いた。

「紅……？」

「女子が唇にさすための紅です。このような合わせ貝を容れ物としていたるものが一般的ですね」

「ふむ……良い色だな」

「たしかに上質なもののようですね」

ありがとう、と微笑んで巴は商人へと合わせ貝を返す。

「なんだ、買わないのか？」

「私はあまり化粧というものをいたしませぬゆえ。それに、立ち回りの際に汗をかきましたらすぐに落ちてしまいますでしょう？」

ですから苦手なのです、と笑う巴。

しかしそれは果たして苦手という理由になるのだろうか、と昭義は思う。巴はかりにも一国の姫君である。普通の姫君は立ち回りなどしない。……まあしかし、彼女は巴だ。一国の姫君であり、国を守る“紅姫”である彼女なら。

「まあ、良いか」

うむ、と生真面目な顔をして一人頷く昭義に巴は首を傾げる。

「どうかなさいましたか？」

「いや、何もなし」

そして二人は再び歩き出す。

なんとも楽しいものだ。

ふとした瞬間にそう思った己に、なんだか新鮮な心地がする昭義である。巴姫からの突然の誘いに当初は戸惑いもしたが、こうしていざ実行となるとそれもどこかに吹き飛んでしまっていた。

珍しいものが沢山ある。見たことも触れた事もない文化が、広がっている。城の中からはわからない、民の暮らしを彼女は昭義に見せてくれようとしての誘いだったのだ。

『今回はお忍びですから、こちらにお召し替え下さいませ』

そう言われて着たこの国の衣も、なかなか良い。ずいぶんと質素なものだが、生地だけはしつかりとしている。なんだか己が皇子でなくなつたみたいで、身が軽くなつたように感じた。

それにしても、と昭義の一步後ろを歩く巴をちらりと垣間見る。

彼女もまた昭義と同じように質素な衣を着ているのだが、驚くほどこの場に溶け込んでいるように思う。城で“巴姫”として過ごしている時分とは身に纏う衣くらいしか変わらないのだが、民達は彼女を姫君としては全く認識せずに通り過ぎていく。普段は“紅姫”としての認識が強すぎるからなのだろうか、それとも民に与える“巴姫”としての認識が薄いからなのか。それを昭義が判別するにはこの国で過ごした時間が短すぎる。だが、気になる事は気になるもの。

「聞いても良いか？」

「はい、何か？」

「今回は忍んで、という事だったが……ずいぶんと手慣れていないか？」

「ああ、そのことを気にしていたのですか」

昭義の問いかけに、巴はふふっと笑った。

「城の中でかしづかれるのは、昔から苦手で……よくこうして抜け出してましたから」

よく父や世話役には叱られたものです、と。巴はどこか懐かしげに目を細めた。

「ふ……昔からその気質は変わらんか」

「……否定出来ませぬなあ」

困ったように、巴の顔が笑み崩れる。城の中では見せたことのない、年相応の無邪気な笑顔に昭義の鼓動が跳ねた。なんだ、そんな表情も出来るのではないか。

この時初めて昭義は“巴姫”でも“紅姫”でもない、ただの少女である“巴”を見つけることが出来た気がした。

「……巴、と呼んでもよいか」

「え？」

「ここは城でも、戦場でもない。豪華な衣を纏っているわけでもない私達を、姫と皇子と知る者もない……ならば、今だけは“ただの人”であつても良いのではないか」

「ただの、人……」

「いまだけは姫でも皇子でもない、ただの人としてそなたと過ごしたい」

昭義の言葉に、巴は一瞬とても驚いた顔をして、そして。

「はい。今だけは私も皇子ではない、“ただの”あなたと過ごした
く思います……昭義殿」

「決まりだな」

わずかに頬を染めて、まるで花が咲いたかのように微笑んだ巴を満
足そうに見て、昭義は低い声で命令を下した。

「おい、聞いての通りだ。護衛は要らぬ。……さがれ」

昭義の発した低い声に応じて、いままで僅かに漂っていた気配が霧
散した。その瞬間、巴の背後に着流し姿の男が現れる。突然現れた
にも関わらず、違和感なく存在するその様はまるで影のようだった。

「姫様」

「……弥太郎、昭義殿との話は聞こえていたでしょう？」

「ですが、」

「いざという時には何とか出来るだけの備えはしています。護衛は、
要らぬ」

ちらりと流された視線と常よりも低い声に、“紅姫”を感じて、弥
太郎と呼ばれた男は小さく息を吐いた。

「承知。……何かあればお呼び下さい。即座に馳せ参じます」

「ありがとうございます」

「……それと、どうやら鼠が入り込んでいる様子。御注意召されよ
「ええ」

短く会話を終えると、彼はまた不意に大通りの雑踏の中へと姿を消
した。

その様子を確認してから、巴は昭義へと向き直った。

「さて、では参りましょうか」

にこりと笑う彼女に、先程までの姫や武将としての威厳は感じられない。

「よかったのか？」

「何を今更、あなた様が言い出した事でございましょう？……今日だけは、姫でも武将でもない。私はただの巴です。楽しみましょう、
“つかの間の自由”を」

そう微笑む巴は、嬉しさの中にどこか憂いを滲ませているようにも見えた。

“つかの間の自由”と、区切りをつけたこの時間。

彼女は彼女なりに思うところがあるに違いない。昭義と同じように、もしかすると昭義と巴は似たような立場に立つ者どうしで、お互いにその背に負っている重みや苦しみを唯一わかり合える存在であるのかもしれないという事に、二人はようやく気付き始めていた。

「“つかの間の自由”、か。ならばこの機会に満喫せねばならぬな」
「そうですよ。さあ、参りましょう」

そして二人は再び歩き出す。

雑踏の中、歩き出す二人を見つめる影がある。

「ずいぶん仲良くなったものですね」

「……」

「不安ですか？」

「何故、此処にいる」

「いやだなあ、貴方と同じですよ」

にへらつと力の抜けた笑みを浮かべる男、白に弥太郎は鋭い視線を投げかける。白の姿は、どうやって手に入れたのか着流し姿で、変装をしている弥太郎と同様に町の雑踏に見事に紛れている。この人物を知っていなければ、誰も彼を異国人とは思わないくらいにそれは完璧だ。

「白は昭義の影ですから。どんな時もあの人を守るために白は在るのですよ、弥太郎殿」

「影……忍と同じか？」

「まあ、そんなところですかねえ……」

曖昧な言葉。ゆるい笑顔。つかめない男だ、と弥太郎は無表情で息を吐いた。異国にはクセのある人間ばかりなのだろうか。この男といい、姫の隣りを歩く男といい、一癖も二癖もある者ばかりだ。

「それにしても、大丈夫ですかねえ……あの二人」

「……」

「ああ。当たり前的事を言うな、って奴ですか」

今はもう雑踏に紛れてしまって、見えない主達を思う。

「どうか、今だけは“ただの人”として過ごして下さいね……昭義」
影の切なる願いは届くのか。そして影達は雑踏の中に溶けた。

十つかの間の自由、了。

九、花簪の意味

……動き始める、音が聞こえる。

「美味い」

「まあ、それはようございまして」

小さな茶屋の一角。昭義と巴は緋毛氈ひもつせんの敷かれた席に座って、しばしの休息をとっていた。二人の手にあるのは、黄金色のたれも艶やかなみたらし団子。城下でも有名な、この店自慢の一品である。

「お気に召したようでほっといたしました」

「……甘味は好きだ」

とてもじゃないが表情豊かな人間とは言えない昭義だが、モチモチと団子を食べる姿はどこか幸せそうで、普段とのギャップに巴は笑った。

「……なにを笑ってる」

「だって、あまりにも幸せそうなのですもの」

くすくすと、巴の笑いはなかなかおさまらない。自国の家臣達から“氷の宰相”などと呼ばれる程の男が団子を食みながら幸せそうにしている姿は、なかなかツボにはまるものがあった。表情を変えずにここまで感情を表せる事が出来るとは凄いと思う。素直に気持ちを表情に出せばいいのに、なんとも不器用な人だ。

「このこの団子は、私も父もお気に入りなのです」

「では帰りにまた寄るか」

「是非に」

しばらくの間、団子の甘やかな味を楽しんだ二人はそれぞれに代金を払って店を出た。

「……私が払うと言った筈だが？」

「自分の分は自分で支払うのが道理。お気遣いなさらず」

「……………」

男女二人が連れ立って町を歩くという状況において、こういう場合は一般的に男がもつものであると昭義は思っただが、巴には関係ないらしい。自国では常に女達（有力者の娘やその他）に金品をたかられている昭義にとっては、そんな巴の姿勢は新鮮であった。もっとも彼女の場合は一国の姫という、身分で言えば最高位にある女なので当たり前といえば当たり前なのだが。

自身の一歩後ろを歩く巴をちらりと垣間見る。凜と背筋を伸ばして歩く彼女は、己の知る女達とは違う。昭義の知る女とは、いつも完璧な化粧と美しい衣を纏って、たおやかにしたたかに微笑み、腹の底ではさまざまな計算を巡らせ、思惑通りにならなければ怒り、泣き叫ぶくらいの事しかできない弱い存在だ。

ところがこの巴という異国の女はその真逆である。“紅姫”である彼女は戦鎧を身に纏い、泥と血に塗れながら己の信念のままに刀を握り、“巴姫”である彼女はどこまでも気高く、どんなときも凜とした姿勢を崩さない。弱い存在など、とんでもなかった。彼女は心の心も腕っ節も、そこらの男達よりもよほど強い。それが今の昭義が知る彼女だ。

「あ、」
「なんだ？」

不意に声を漏らした巴に昭義は振り返り、立ち止まる。

「あ……いえ、何でもありません」

どこか慌てて視線を戻した巴に、内心で首を傾げながらその視線があつた先を見るとひとつの露店。地に直接敷かれた敷物の上には、陽の光にきらきらと輝く色鮮やかな装飾品が並べられている。ふ、と昭義は僅かに笑みを零した。

「気になるのか」
「い、いえ。そんな」

尋ねれば、巴は僅かに頬を染めて首を横に振る。

「私のような女子には、似合うものではありませんから」

まるで自嘲するかのようになり、ぽつりと零した言葉。そして何事も無かったかのように微笑む巴に、昭義は小さく溜め息を吐く。そして、唐突に巴の手を取って歩き始めた。

「しよ、昭義殿ツ！？」

ずんずんと強引に進んでいった先に、先程目に留まった露天。

「何をツ、」

「見たかったのだろうか？」

「……私には必要ありませんね」

すぐ目の前にある、きらきらとした美しい装飾品達は戦に出る際には不要だ。巴はいつものように、そう思ったのだ。

しかし、昭義は眉を寄せる。

「今だけは、“ただの”巴なのだろうか？……ならば良いではないか、建て前など」

「あ……」

昭義の言葉に思い出した。今の巴は“紅姫”でも“一国の姫”でもない。ならば、今だけは思うがままにあっても良いのではないか。

「別に、見るだけなら金もかからんしな」

「ちよいとダンナあ、それを言っちゃあいけないよ」

店の目の前でしれっとそのような事を言う昭義に、その露店の商人である男が苦笑する。

そんなやり取りに、巴は思わず笑い声をあげた。

「ふふっ……そうですね、では少し見せて頂きましょうか」
「話のわかる娘さんで良かった！わざわざ京の都から買い付けてきたんだ、ゆっくり見ていってください」

露天商の男は喜色満面の笑みを浮かべて、装飾品の簡単な紹介を始めた。珍しい翡翠ひすいがあしらわれた櫛くしに、細い黄金の鎖が美しい音を奏かなでる簪かんざし、黒の漆原に桜の花弁が散る様を描かれた手鏡なんてももある。どれも感嘆の息を漏らすような一品ばかりだ。

「なかなかよいものだ」

「ええ、本当に。……綺麗」

目をきらきらと輝かせて、巴は色とりどりの簪を次々に手に取る。その表情は年相応の少女のもので、昭義は知らず知らずのうちにその口元を緩めた。

「どうだい？娘さん、気に入った物はあるかい？」

「こんなに沢山あると目移りしてしまいますね」

ほう、と頬に手を当てて溜め息。どこか困ったように品々を眺める巴に、露天商の男が助け舟を出した。

「なんだったら、隣りのダンナに選んでもらったらどうだ？」

え、と巴が一瞬固まる。

珍しく心の底から困惑して、巴は恐る恐る昭義を見やった。そして思いがけない光景を目にして、その大きな目を丸くする。

「……昭義、どの？」

「なんだ」

「あ……あの、その手にされてるものは」

昭義が手にしていた物は、大ぶりの赤い花椿が細工された簪。黒い漆原地の簪に椿の造花と細い金飾り細工があしらわれている。質素な作りのものながら、鮮やかな赤い椿の花が見る者の目を惹く。自然に手渡されたその簪を見て、巴は感嘆の息を漏らした。

「決まりだな」

昭義はそんな巴の様子を満足げに見て、ひょいと手から取り上げたその簪を彼女の結び上げた髪に挿した。

「そなたの美しい黒髪には、赤い花がよく似合う」

ふ、と柔らかな笑みを漏らしてそう告げる昭義に、巴はほんのりとその頬を朱に染めた。

「さすが、ダンナの見立ては確かだねえ。その簪は娘さんに本当によく似合うよ」

「あ、ありがとうございます」

につこりと笑う露天商の男の言葉に、照れくさそうに巴がはにかむ。そんな巴の手を引いて、昭義は歩き出す。

「ちょ、昭義どの!？」

慌てて店を振り返ると、男がひらひらと楽しげに手を振っている。

「か、簪をお返ししなければ!」

「その必要はない」

見上げた先にある昭義の顔はにやりと笑っている。

「すでに買い取った」

気に入ったのだろうか？

そう囁いて不敵に笑う昭義に、巴の鼓動が不自然に跳ねた。顔が熱い。

「返そうなどとは思わないよ？……その簪はそなたにこそ、相応しい。他の誰でもない、そなたに」

黒髪に咲く、赤い花椿。その簪を見た途端、凜と鮮やかなその花姿が巴に被った。……その赤い椿の花こそが、彼女だと思った。

「初めて、他人トクに何かを贈りたいと思ったのだ。……受け取ってくれるか」

それは昭義のまぎれもない本心で、彼は今まで親族以外に何かを贈ろうと動いた事はない。そのような事を思った事も無かった。それゆえに、昭義自身の感じる戸惑いや不安も多い。けれども、白の言葉が彼の背を押した。

『あなたの心に少しでも引っかけたものは、決して素通りしないことです。……それはきつと昭義、あなたにとって大きな意味を持つものですよから』

昭義の唯一無二の友人が真摯に告げた言葉。彼がどれほど己を案じているかも知っている。自国では立場上、迂闊な言動は出来なかった。幼い頃から、自身の思いに反してもやらなければいけない事も

あつたし、金と権力の渦巻く城の中で上手く生き延びるために“昭義”という一人の人間を押し込めて生きてきた。

けれども、此処は海を渡った先にある異国だ。此処で出会った人々は力強くも温かく、異国から来た皇子である“昭義”をまるごと受け入れてくれた。この地を守る姫は、皇子ではないただの“昭義”として過ごすひとときの自由を与えてくれた。

だからこそ、今、昭義は生まれて初めて己の心に素直になろうとしている。

「……………迷惑、か？」

ぼんやりと昭義に視線を合わせたまま、何も話さない巴に戸惑いながら問う。その言葉に、巴はハツと我に返ったかのように首を横に振った。

「いいえ！いいえ！私は嬉しかったのです、昭義どの！……………あなたがそのように選んで下さり、私に贈りたいと申されたその事が嬉しかったのです！」

頬を朱に染めて、漆黒の瞳をきらきらとさせた巴は力強くそう言った。

「嬉しかったのです、本当に……………ありがとうございます。大切に、大切に致します」

そして見せたのは極上の笑み。どくりどくり、と鼓動が速まる。

「そうか。……行くぞ」
「はい、参りましょう」

そして再び、二人は道を連れ立って歩き出す。相変わらずの立ち位置ではあるものの、その距離は少しばかり近づいたようだった。まるで二人の心の距離のように。

「……なるほど、な」

そんな二人の様子を一人の男が見つめていた。じっと二人の遠ざかる背を見つめている。

「……………」

無言で口元が笑みをかたどる。

見つけた。

確かに男はそう呟いて、また通りの喧騒の中へと紛れていった。

何か音が立てて動き出す、始まりの音が響く。

十花簪の意味、了。

十、姫、立ち回りを演ず

……ああ、やってしまった。

そう思った時には既に遅く、全てが終わった後だった。周囲から上がる歓声。野次。笑い声。苦笑いを浮かべて人垣の中に立つその人を見やれば、眉間に寄ったシワが数本。

……やってしまった。

おそらくは既に忍達によって事の仔細は伝わってしまっているだろう。城に帰った後の事が容易に想像出来て、巴は心の底から溜め息を吐いた。

事の次第は、時を今よりも僅かに遡る。

昼下がりの大通りは、朝に比べるとだいぶ穏やかな人波になる。人々は仕事の傍らで立ち話に興じ、子供達が歓声を上げて走り抜けていく。

昭義と巴もそんな人々の中をのんびりと歩いていた。巴が歩くたびにしゅらしゅらと簷が音をたてる。

「……楽しいか？」

「ええ、とても！」

にこにこと笑顔が絶えない巴に昭義が尋ねれば、満面の笑みで返事が返ってくる。城下町をぶらりと二人で歩いているだけなのだが、楽しい。

執務にも護衛にも邪魔されず、自由きままに過ごす事ができる喜びを二人は噛みしめていた。

「それにしても、緋山は良い国なのだな」

ぼつり、と昭義がこぼした言葉に巴がぴくりと反応する。

「城下の民がこのように生き活きとしているのは国が豊かな証だ」

昭義の言葉に巴は深く頷いた。

「……国は人、人は宝。幼い頃から私は父にそのように教えられてきました」

幼い頃、父の胡座あぐらに乗せられて言い聞かせられた言葉が蘇る。

『……よいか、巴。民の上に立ち、国を治める我らが守らなければならぬのは人なのだ。この“緋山”という家や名ではない』

『ちちうえ。ともえは、ちちうえやみなをまもりとうございます』

『良い子だな、巴は。……よく覚えておきなさい。国は人、人は宝だ。例え国が滅びても、そこに生きる人々がいればまた新しい国が興る。人がその土地に生きる限り、人の世は終わらぬのだ』

国は人、人は宝。

こうして心身共に成長した今、改めて父のその言葉に胸をうたれる。……守りたいと思った。

「私も父も、この地に生まれ育った人々の幸せを守りたいだけなのです。昭義殿」

城主であろうとなかろうと、同じ地に生まれ育った人間だ。本当は身分など関係ない。ただ、自分はこの地を守る役目を負った家に生まれついただけのこと。民草との違いなどそれだけだと巴は考えている。

「……そうか」

昭義はただひとことそう呟いて、つかの間、遠い自国に思いを馳せた。

「あら、あれは何でしょう……？」

不意に呟いた巴の視線の先、二人が歩む道の前方に人だかりができている。訝しみながらも歩を進めれば、聞こえてくる怒号。

「先に参ります」

昭義に一言そう言い残すと、巴はぎゅっとその眉間に皺を寄せて、一直線に人だかりの中へと駆け込んだ。

人だかりの真ん中で、数人の男が一人の少女に絡んでいる。野太い怒鳴り声に、萎縮する小さな肩。

開けた視界の先で目に映った光景に、巴はとつさに声をはり上げた。

「止めなさいッ!！」

突然の怒鳴り声に、両者の動きが止まった一瞬の隙をついて巴は男達と少女の間に立ちふさがった。

「なんだあ、アンタ？」

「おいおい、えらい別嬪な姉ちゃんじゃねえか！」

「アンタも俺達の相手をしてくれんのかあ〜？こりゃいい！」

下品な笑い声をあげて、男達は巴を舐めるように見る。その不躰な視線をもとせせず、巴は正面から男達を睨みつけた。

「……このような年端もいかぬ少女に、大人の男が数人がかりで何をしているのですか!？」

「ずいぶんとまた威勢のいい姉ちゃんだなあ」

「俺達はよ、この嬢ちゃんに礼儀つてもんを教えてやってただけだよ。なあ？」

「ああ、そうとも!！」

げたげたと笑い声を上げる男達とは対照的に、巴の顔はどんどんと険しくなっていく。

「そなたらは、恥ずかしくは無いのか!大の大人が寄つてたかつて、このようなか弱い少女を苛めるなど……たとえ如何様な理由があるうとも言語道断!!力ある者は力無き者を守るものだ。それを力をもって弱きを苛めるなど、男の風上にも置けぬわ!！」

巴の怒鳴り声がびりびりと周囲に響き渡る。戦場に轟く声だ。それまで笑い声をあげていた男達も、一瞬驚き、そしてその表情を変えた。

「んだとこの…！偉そうに言いやがって…！」

「痛い目みねえとわからねえようだなア、姉ちゃん」

じりじりと巴に迫り寄る男達。巴は背後で震えている少女をちらりと見やった。

「……ッ…！」

その目に涙をいっぱい溜めて、少女はぶんぶんと首を横に振る。

「大丈夫よ」

微笑んでみせれば少女は目をまん丸にして固まった。

この娘をお願い、と近くにいた人々に手短に頼んで巴は男達と正面から向き合う。

その数は、5人。

ざわざわと周囲が心配そうにざわめく。その中にはようやく追いついたといった感じの昭義もいた。一瞬、視線が交差する。昭義が何か言いたげに口を開く前に、巴が先手を打った。

「誰も助太刀は無用です…！…私が、お相手致しましょう」

ざり、と砂の擦れる音がする。

妖艶ともいえるような艶やかな笑みをその口元に浮かべて、巴は静かに身構えた。

「女が男にかなうわけねえだろうが」

「さあ？どうでしょう」

厭らしい笑みを浮かべた1人が飛びかかる。巴はすうっとその身を沈め、脚払いをかけてその男の体制を崩すと、流れるような動作で首筋に手刀しゅとうを入れて地に転がした。

「この女ア!!」

「ぶち殺してやる!!」

激昂した男達が次々に襲いかかってくるのを、まるで舞いのような軽やかさで巴は身をかわしていく。ひらり、着物の裾が舞って男の顎に強烈な掌底ていしつが入った。どさりと崩れ落ちる男の体。その素早い動きに周囲も、当事者である男達も目が付いていかない。気付けばまた1人、鳩尾みぞおちに一撃を決められて倒れ込んでいる。

「てめええツ!!」

次々と地に伏せる仲間の姿に湧いた怒りのまま、男は巴の向けた背に向かつて突進していった。

振り返りざまに巴がすぱん、と脚払いをかける。砂埃を巻き上げて転倒した男が怒りの形相で顔を上げた瞬間、鼻を中心とした顔面に強烈な衝撃と激痛が襲いかかった。

「ぎゃあッ!!」

そのまま顎を蹴り上げられ、仲間達と同じく彼の意識も暗転する。最後に1人残された男は、その体を震わせながらボロボロの刀を鞘から抜きはなつた。その体の震えは屈辱か怒りゆえか、もしくは怯えか……男自身にもそれはわからない。

「ちくしょう、ちくしょう……ッ！ぶった斬ってやるああ！」

怒号を上げ、刀を振りかざして巴に走り寄る男に周囲が悲鳴を上げる。昭義だけが静かに事を見守るなか、不敵な笑みを浮かべて巴は懐から懐刀を抜きはなつた。

ぎいん、と鈍い金属音を立てて男の刀のが真つ二つに折れる。

「あ、あア……ぐあッ！！」

折れた刀を呆然と見つめる男は首筋を峰打ちされ、呆気なく地に伏せた。

あつという間に着いた決着に唾然としたままの周囲をよそに、巴は懐刀をしまい込んで乱れた着物の裾を整えた。そしてへたり込んでしまっている少女の元へ行き、優しく微笑む。

「もう、大丈夫よ」

少女の目から大粒の涙がぼろぼろと落ちた瞬間、周囲から歓声が上がったのだった。

そして冒頭に戻る。

間違つた事をしたとは思わないし、後悔もしてはいないがしかし、怒りに任せて起こした行動はあまりにも目立ち過ぎた。

やんや、やんやと騒ぎ立てる民衆達。沢山の人々に肩を叩かれ、よくやったとねぎらわれ、悪い気分はしないが……今回はいちおうお

忍びなのだ。こんなに目立ってしまったては、お忍びの意味など何も無いように思う。おそらく民衆には自身の身分なんかはバレてはいないように思うが、忍達によって今日の事は城にまで届くだろう。はあ、と溜め息を吐けばいつの間にかすぐ隣りまで来ていた昭義に手を掴まれた。

「昭義、どの」

「帰るぞ」

そのまま強く手をひかれて歩き出す。ほどなくして騒ぐ人ばかりから抜け出した。

「申し訳ありません」

無言で手をひく昭義に耐えきれず、ぽつりと巴は咳くように謝罪を口にした。

「何故、謝るのだ」

「勝手に飛び出していき、御迷惑をおかけいたしましたから」

「迷惑など、何もかけられていないが」

「では何故、私と目を合わせようとしらないのです？お怒りだからでございませう？」

俯いて立ち止まった巴に昭義も立ち止まり、小さく溜め息を吐いて振り向いた。

「そうではない」

「では、何故？」

「……そなたは1人ではないのだ。少しは、頼れ」

はっと巴が顔を上げる前に、昭義はふいつと前を向いて歩き始めた。手を掴まれたままなので、巴も同じく歩き始める。風に吹かれて流れた黒髪から覗く耳が赤い。それを認めるやいなや、巴の顔まで赤く染まった。

行きとは違い、無言で歩く帰路であったが不思議と居心地の悪くない時間だった。知らず知らずのうちに、穏やかな笑顔を浮かべていることに2人は気付かない。

……今にして思えば、これが2人にとって最後の平穏な時だった。動き出した歯車は、止まる事を知らないのだ。

十姫、立ち回りを演ず、了。

十一、鬨の声

ようやく夜明けが訪れて東の空が白む頃、巴は床からそつと抜け出した。からりと障子を開ければ、ひやりとした朝の空気が身を包む。それでも近頃はだいぶ暖かくなってきたように思った。桜もすっかり散り、葉桜が美しい新緑の季節。全ての生命が生き生きとするこの季節が巴は好きで、この時期は早朝からよく遠乗りに行ったものだが、今年ばかりは一度もそんな気になれないでいる。

……全てはあの日届いた隣国からの書状のせいだ。

不意に書かれていたその内容を思い出して、巴はその秀麗な顔を歪ませた。あの日から連日、父や重臣達と共に会議を重ねる今も変わらない現状を思っつてつい溜め息を吐いてしまう。

ゆっくりと日輪が東から登ってゆく。そして始まる今日を思い、巴はその瞳に力を込めた。

“ 緋山が長姫、巴姫を我が正室として迎えたい。……この申し出を受ければよし、受けぬならば武力をもって緋山を侵す。 ”

突然、城を訪れた使者の携えた書状に書かれていた内容は要約するとこのようなものであった。

「なんたる無礼な！」

「縁談を受けねば侵攻するなど……我が国に対する脅しとしては十

分ですな」

「おのれ、佐竹さたけの若造め……！」

緋山の城の一室。名だたる重臣達はみな、憤りを隠せずにいる。

「しかし、佐竹はこの辺りで一番の大国。小国の我が国よりも兵力は多く、たとえ刃向かったとしても数の上では勝ち目などありませんぞ」

「我が軍が簡単に負けるとお思いか!？」

「そうではないが、貴殿はこの戦でどれほどの犠牲を出すと思っておるのだ!生半可な戦ではないのだぞ!？」

「ではどうするというのだ!?!」

佐竹からの書状が届いてから数日、繰り返される会議はずっと平行線を辿っている。城主である忠信も巴も毎回出席していたが、まだ一度も発言をしていなかった。

「静まれ」

忠信のただ一言に、その場にいる全ての人間が口を閉ざした。ふう、とひとつ重い息を吐いて忠信は静かに口を閉ざす。

「この数日、何も言わずして皆の言葉を聞いてきたがお前達……此度の件に最も関わる者の意見を聞かずしてなんとする?」

ついと見やった忠信の視線の先には、常の如く凜と佇む巴の姿があった。

「なあ、巴。此度の件……そなたはどう思っておる?」

その問い掛けに、誰かがごくりと唾を飲んだ。
巴もまた、静かに口を開く。

「……私は、武家の娘で御座います。家のため、……国のため、我が身を架け橋に他国へ嫁ぐ事など幼き頃より覚悟しておりますれば、父上の采配に、私は従いますわ」

凜とした瞳で静かに忠信を見つめ、巴は微笑んだ。

「姫様……」

誰かがぼつりと呟いたのを皮切りに、小さく鼻をすする音が響き始める。

「巴よ」

「はい」

「そなたが国を思うその心を、この場にいる皆はよく知っておる。それ故、佐竹よりこのような書状が届いた時からそなたがそう言うだろう事もわかっておった」

忠信がそう静かに告げれば、何人かの重臣達の頭が下がる。……その肩は僅かに震えていた。

「父上……本当は、皆も分かっているのをごさいますしょう？私が佐竹に嫁ぐ事がこの緋山にとっては一番良い、と」

巴は一度だけ、視線を手元に落とす。上質な衣の袖から見えた己の手は、鍛錬や戦で薙刀を握って何度となく潰れたマメにより、皮膚が厚く、固くなっていて、とても姫君の手には見えない。けれどもそれが、巴の誇りだった。

「亡き兄上に代わり……この手に刃を握り、戦場を駆け回ることでの国を守ってきました。しかし、たとえ兄上が生きていたとしても私は同じ事をしていたでしょう。全ては父を、皆を、民を、この緋山の国を守りたいという私の強い願いゆえです。緋山の安寧こそが私の願い……そのためならば私は何度でもこの身を捧げましょう」

忠信を見つめる巴の目は力強い光を宿していたが、その表情は穏やかな笑みを形作っていた。

巴の言葉を聞いて後、忠信はしばらく黙ったままでいたがひとつ大きく息を吐くと、ようやく口を開いた。

「巴よ。そなたの国を思う心はとても嬉しい。……しかしだ。そなた自身は本当にそれでいいのか？」

「これは、私自身の願いですわ。父上」

いぶかしげな顔で巴がそう言えば、忠信は首を横にふった。

「緋山の姫でも、紅姫でもない、巴という一人の人間としてだ。巴よ、そなたは佐竹に嫁いだとして幸せになれると思うておるのか？」

忠信の思いがけない言葉に、巴は戸惑う。嫁ぐことで己が幸せになるかなど、正直考えたこともなかった。

「巴よ……そなたは僕のただ一人の娘だ。本当に大切な、愛しい娘だ。僕はこの緋山の国主であるが、それと同時に一人の父親でもあるのだよ。この乱世において、婚姻による同盟は国々の安定をはかる上で大切な位置を占める……武家の娘はその役割を担う道具とみ

なす輩も確かに多い。しかしな、儂はそなたをそのように見た事は決して無い」

そして忠信はふと酷く優しい笑みをこぼす。

「父として、そなたには幸せになって欲しいのだ。そしてそれは皆も同じように思っている……だからなあ、巴。そなたは佐竹にはやれぬよ」

そうきつぱりと言い切った忠信の顔は、一国一城の主のものではなく、確かに1人の父親の顔をしていた。

「……しかし」

巴は半ば呆然とした様子で呟いた。父親としての忠信の気持ちが嬉しく思う一方で、国の現状を思えば複雑な気持ちになる。それ以上の言葉は出なかった。

「……殿も人が悪い。既に決断されていたのならばそうと先に仰って下さいませ！」

「そうですね。さすれば我らもこのように悩む事は無かったかと存じますれば」

巴が口ごもったままだいると、重臣達がどこかほっとしたように口々に発言し始めた。

「殿、姫様。恐れながら、我ら臣下は此度の佐竹の申し出を受ける事には反対で御座いまする」

「噂に聞けば、佐竹典康公はさたけのりやすずいぶんな癩癩持ちで残忍な方とか……そんな男の元に姫様を行かせるわけには参りませぬ」

重臣の1人の言葉に、皆が頷く。

「姫様には幸せになっていただきたい……緋山に生きる民達も皆、心は同じです」

「そうか……」

重臣達の言葉に、忠信は感極まった様子で何度も頷いた。ただ1人、巴だけが困惑の色を隠せない。

「しかし、私が嫁がなければ佐竹と戦になるのは避けられませぬ。もしも負けた時には……」

「その時はその時であろう?」

「父上!」

忠信の言葉に思わず巴が鋭い声になる。

「佐竹にはな、以前にも同じような事があった。隣国の川見^{かわみ}が佐竹からの圧力をかけられ、同盟を結んだが、無理難題を押し付けられた拳げ句……攻め滅ぼされた。今回もおそらくは同じだろうて。狙いはそなたと我が緋山の豊かな土地」

「おそらくは姫様が嫁がれても、同盟などではなく従属国として扱われるでしょう」

言葉が出ない巴に視線をやって、忠信はにやりと、どこか吹っ切れたような笑みを浮かべた。

「ならば緋山は小国なりの意地を見せてやるうかと思つ。理不尽な力などには屈せぬと、佐竹に一泡吹かせてやるうぞ」

おお、と忠信に伝えて臣下達が声を上げる。その声は会議の場となつている広間にいる重臣達からだけでなく、外に控える無数の兵達からも声は上がった。忍達は声も上げず、姿も見せないものの、人知れずその気持ちを高ぶらせていた。

それはまるで戦場で鬨とぎの聲が上がったかのようであった。

十鬨の聲、了。

十二、巴の涙

……もしかすると本当は、ずっと泣きたかったのかも知れない。

「戦が、始まるそうだな」

城の庭に1人佇む巴にそう声を掛けたのは昭義だった。

「いえ、まだ決まった訳ではありませんが……おそらくは」

昭義に視線を向ける事も無く、巴は力無く笑う。

「戦前というのに随分と気落ちしているようだな、紅姫ともあろう者が」

ふつと鼻で笑う昭義に対して、巴はようやく顔を上げてゆるゆると首を横に振ると、泣きそうな顔で笑った。

「今回の戦に、“紅姫”はいませぬ」

「……出ないのか？」

「ええ。先ほど軍議にてそのように決まりました」

「そなた、納得はしていないのだな」

「え？」

「今にも泣きそうな顔をしている」

昭義の言葉に巴は一瞬驚き、そしてその顔を歪めた。
昭義はひとつ溜め息を吐いて、ふとその表情を緩めると巴から視線を逸らす。

「ここには他に誰も居らぬ……どうもすっきりとしない悩みや難しい問題などは言葉にしてみると案外、変わるものだぞ」

優しい声音で言われた言葉に驚いて、巴は思わず昭義を見つめる。その視線を横顔に感じて、昭義は半ば慌てながらも言葉を続けた。
……なんとというか、まったくもって自分らしくない。

「まあ、だからと言って私に話せと言っている訳ではないからな！ただ、私も聞き役くらいにはなれると……、うむ」

正直、自分自身でも何が言いたいのかわからない昭義である。ただ、明らかに気落ちしている巴の力になりたいと思っただけの言葉であるが、今までそのような事を他者に思った事のない昭義にはその気持ちをもどくように伝えればいいのか、よく分からなかったのだ。それでもなんとなく心配している事は伝わったのである。巴はようやくちゃんと微笑んだ。

「もしよろしければ、共に散歩でも致しませぬか？」

その言葉にほっとしながら、昭義は頷いたのである。

「此度の戦が起こるとすれば、原因は私なのです」

美しい庭園を歩きながら、巴はそう切り出した。

「それはいったいどういう事だ？」

同盟国の皇子とはいえ、今回の事に直接関わりの無い昭義に国の内
部事情かわわざわ知らされる筈はない。だから彼に巴の言葉の意
味がわからないのは当然である。

巴は今回の話の発端となった佐竹からの書状と、忠信の下した決断
についてをかいつまんで昭義に話した。

「なるほど……これで巴殿が気落ちしていた事や紅姫が出陣しない
事にも納得がいった。つまりはそなたを守るための戦、というわけ
か」

「……ええ」

相手の狙いは巴なのである。常ならば自軍の大きな戦力として、紅
姫である巴は戦の先陣をきって立つが、今回はそれをすると逆に窮
地に追い込まれる可能性が高い。いつ何が起こるかわからない戦場
で、相手の目的である巴が敵陣に斬り込む事は飛んで火に入る夏の
虫と同じだ。その事を巴自身がよく分かっているが、戦の原因であ
る己自身が自軍の役に立てないという事が罪悪感やいたたまれなさ
といった感情を生んでいるのだろうと昭義は思った。

『これまで緋山を守って下さっていた姫様を、今度は我らがお守り
します！』

軍議の場で、皆にそう頭を下げられた時に感じた気持ち、巴は言
葉に出来ない。いかに自身が皆に大切に思われているかを身にしみ
て感じた喜びと、大切な人々と国を自身の手で守れない……どこか
焦りにも似た罪悪感と不安がぐるぐると巴の胸の内に渦巻く。

「怖い、か？」

昭義に尋ねられてはっとした。そうか、自分は怖かったのかと。

「守られるだけというのが、こんなにも怖いなんて思ってもみませんでした」

吐いた息が僅かに震える。自分の知らないところで、大切な人達を失うのが怖い。

「これまで紅姫として共に戦ってきた仲間である自軍を信じられないのか？紅姫無しでは守りきれぬと？」

昭義の言葉に何度も首を横に振る。

「いいえ、いいえ！皆を信じられぬなどあり得ませぬ。違うのです……私は、私のために大切な人々が死んでいく事が怖いのです」

小さく俯いてしまった巴に、昭義は言った。

「……この戦はそなたのせいではない」

「いいえ、昭義殿。これは私のせいなのです」

「違う」

「私がいるから……！」

それは悲痛な声だった。どこまでも己を責めようとする巴に、昭義は眉根を寄せる。

「何故、それほどまでに己がせいにしようとするのだ？私にはそなたが自分で自分を責めたいだけにしか思えぬ。……何をそんなに恐れている？」

昭義の言葉に、驚いたように巴は目を見開いた。その瞳に、瞬く間に涙が溜まっていく。

「だって……、国を、皆を守るべき立場にいる私が、今この国を危ぶめているのですよ！？そんなこと、あっていい筈ありませんの！」

「巴殿……」

大粒の涙がぼろぼろと頬に落ちる。その様子に昭義がはっと息をのんだ。

「この地を治める立場に生まれ、力を与えられている私の義務は皆を守ること……あの日、私は託されたのです！なのに……ッこんな事、許される筈ないでしょう!？」

「巴殿、」

「本当はあの時、父上に反対しなければいけなかった！私が嫁げば戦は起こらないのです。なのに……私はッ!！」

「巴ッ!！」

昭義に名を呼ばれ、強く肩を掴まれてようやく巴は我にかえった。その様子を見て、昭義はほっと息を吐く。

「す、すみませぬ……私、」

「いや、すまぬ。泣かせてしまったな」

昭義は申し訳なさそうに眉をさげて、巴の頬を伝う涙をそっと袖で拭いた。そのあまりにも優しい手つきに、巴は頬を染める。

「そなたはひとつ忘れている」

「え？」

「大切な者を守りたいという心は、皆が持っているという事だ。あなたが皆を守りたいと思うように皆もまた、そなたを守りたいと思っっている。忠信殿も、兵達も、忍達も、民も皆……。気付いておらぬ訳ではないだろう？」

止まっていた筈の涙が、再びじんわりと滲み始める。

「そなたもまた、この緋山の地に生きる1人。国というものは、皆が助け合って成り立つものだろう？そなたはこの国の姫であり、“紅姫”でもあるが、その前に1人の巴という人間だ。……たまには甘えたつていい。それを皆も望んでいる」

『幸せになつてほしい』

昭義の言葉に、皆に言われた言葉が重なる。

「だからもう、自分を責めるな」

涙が溢れた。ぼろぼろと瞳から零れる大粒のそれは、まるで止まることを知らぬかのように溢れ出てくる。

「本、当に……いいんで、しょうか？」

「ああ。私が許す」

感情に突き動かされるままに抱き寄せた体は細く、小さかった。声を殺し、肩を震わせて泣く巴に愛しさがこみ上げてくる。彼女はあの細い肩に、いったいどれほどのものを抱えているのだろうか。いつか、潰れてしまいやしないかと昭義は怖くなって抱き寄せる力を

強める。肩に染み込む涙の温かさに、どうしても胸が苦しくなった。

「私も、そなたをこの手で守りたい」

気付けばそう呟いていて、腕は巴をもつと感じようと知らぬ内に力を強めている。

もぞりと腕の中で巴が動いた。彼女は涙にかすれた声で、小さく昭義の名を呼ぶ。

「どうか、巴と……名で呼んで下さいませ」

男性にこのように抱きしめられるのは、初めてであった。なのにどうしてか、嫌ではない。巴は昭義の腕の中で安心していている自分がいる事に気付いていた。すぎるようにその背にそっと手を回す。思っていた以上にその背は大きかった。涙はまだ止まらない。

「巴……」

呼ばれ慣れた自分の名が、昭義に低く耳元で呼ばれるとまるで特別なもののように感じる。温かい何か巴の胸の中に広がった。

愛しい、と。

はっきり感じたのはどちらが先だったか。2人は何も言わず、ただ巴の涙が止まるまで寄り添い合ったままだった。

十巴の涙、了。

十三、約束

幼い女童めづらわが広い庭園の中をとたとたてと駆け回っている。肩までの高さには、一人の少年。

『ちいあにうえー！』

ぱふ、と女童は背中を向けていた少年の足に飛びついた。その衝撃によるけそつになりながらも、彼はなんとか踏ん張り、ゆっくりと振り向く。

『こら、危ないだろう？』

『ちいあにうえー！きょうはおかげんがよろしいのですか？』

大きな目をきらきらと輝かせて見上げてくる女童に、彼は小さく息を吐くと柔らかく微笑んだ。

『うん。今日はだいいいみたいだ。ところで、兄上はどこだい？一緒にいたんだろう？』

『だいいにうえは、みなとタンレンをしています！』

『……じゃあまた勝手に此処まで来たんだね？まったく、此処にはあまり来てはいけないと言っただろう。病がうつつたりしたら大事だぞ？』

小さな女童に視線を合わせて、少年は顔をしかめてそう言った。途端に、女童はむっと頬を膨らませた。

『だって……みながそういって、ちいあにうえにあわせてくれない』

んだもの。だいあにうえはあわせてくれるってやくそくしたのに、
タンレンばかりだし』

みんないじわるだわ、と唇を尖らせた女童に少年は思わず吹き出す。

『そうか……でもね、皆は小姫を心配して言っているのだからいじ
わるなんて言ってはだめだよ？兄上も、国の皆を守るために頑張っ
てるんだから応援してあげないとね』

『……はい』

『いい子だ』

少年は嬉しそうに微笑んで、優しく小さな頭を撫でる。女童はそれ
はそれは嬉しそうに笑い声をあげた。

『本当は、私も父上や兄上のように強くなって皆を守りたいのだが
ね』

なかなかそうもいかないみたいだ、と悲しげに微笑して不意に空を
仰ぐ。澄んだ青い空に溶けていつてしまうんじゃないかと思つくら
い、少年の姿は儂く見えた。

女童は急に怖くなって、少年の着物の裾をぎゅっと掴む。

『小姫？』

『ちにいさまのぶんまで、わたくしがみなをまもりまます！だから
……』

いなくならないで。

その言葉はいつも声にならない。

『……ありがとう』

柔らかく微笑むその顔が、酷く懐かしい。

ああ、この先を私は知っている。嫌だ、嫌よ。

死なないで。

そして巴は、泣きながら目を覚ました。

久しぶりに随分と懐かしい夢を見た。

冷たい井戸水で顔を洗って、巴はひとつため息を吐く。泣いたせいでほんのりと赤く、熱を持った目元には井戸水の刺すような冷たさがちようどよかった。

そういえば、こんなに泣く事も久しぶりだと巴は思う。昨日といい、今朝といい……あれだけ泣いたのに、よくも涙が枯れないものだ。そう考えた時、昨日の庭園での昭義との一幕を不意に思い出して、水で冷えた筈の顔が再び熱くなるのを感じた。

愛しい、と。

そう自覚してしまった瞬間に気付いた。どうしてあんなにも罪悪感に襲われてしまったのか、その理由を。

ため息がこぼれた。思わず手にしていた手ぬぐいに顔を埋める。じわり、と湿った布地の感触が肌に触れる。朝の風が背に流したままの長い髪を揺らした。

「姫様、これを」

「弥太郎……」

不意に背後に現れたよく知る気配に振り向けば、いつもと変わらぬ黒い装束をまとった己の忍が足元に控えていた。その手には乾いた新しい手ぬぐい。弥太郎は名を呼んだきり、無言のままの主の手から湿った手ぬぐいを取り、自身が用意したものをそっと握らせる。その頭上に、ため息が落ちてきた。

「……随分とお悩みのようですね」

周囲に人の気配がないことを確認して、声を出す。その声は普段よりもいくらか高い。その声に、はっとしたように巴は弥太郎を見つめた。

「何をそのように悩んでおいでなのですか、巴様」

「あ……私、は」

「此度の戦の事かと思いましたが、どうやらそのこととはまた別にお有りのご様子」

弥太郎の言葉に、巴はびくりと肩を震わせて顔を歪めた。

「弥々《やや》……、私は、巴はどうしたらよいのでしょうか!?!」

「姫様」

「この国を、皆を守るのならいくらでもこの身を捧げると誓ったのに……好いた人でもない男の元に嫁など行きとうないと思う私がいるのですッ!」

ぼろり、とまた涙が零れ落ちた。

女としての自分など、とうの昔に捨てたと思っていたのに、今にな

って捨てられる筈も無かったのだと思い知る。だってこれは“女”である巴の感情だ。

「教えて下さい、弥々……いえ、弥太郎。どうしたらこの気持ちを振り払えるのですか？」

神様どうか、あの日の誓いを違えてしまう前にこの気持ちを消して私を“女”なんかにしなさい。どうか、こんな時になって今更私を“女”に戻さないで。

「姫様、あなたは何をそんなに恐れるのですか？」

静かな声でその忍はゆっくりと主に語りかけた。

「その気持ちがあることの、何が悪いのでしょうか？慣れない感情に戸惑っているのかもしれないが、それはそれだけのこと。人間なのですから当たり前です。心というものは捨てられない……私はそれを姫様から教えて頂いたはずですが」

涙に濡れた瞳で弥太郎の目を見つめれば、その顔が僅かに優しく微笑んだ。

「心があるからこそその人間、そう私に仰ったのは嘘だったのですか？」

「……ッ、いいえ！」

「ならば姫様、悩まなくても良いではありませんか。どうぞ、姫様の心のままに。先に何があるかと私は姫様にお仕えしていきます……

…姫様が姫様である限り」

その言葉にはつとして、涙が止まった。私は私であっていいんだと、気付かされた。涙が自然に止まる。巴の表情が変わった。

「弥太郎、私の目を覚まさせてくれた事……感謝致します」

その黒い両眼に宿る強い光を認めて、弥太郎は僅かに口角を吊り上げる。……この強い意志を秘めた瞳こそ、主たる巴には相応しいと思っただ。

僅かな微笑をその口元にたたえて、巴は言葉を紡ぐ。

「父上は戦う決意を為さった……なれば、私はそれに従うまでのこと」

きつと父上は知っていたのだ。私が迷う事も、胸に秘めた誓いも、密やかに育っていた想いでさえも。

「弥太郎、佐竹への偵察任務を下す。敵の思惑が真実なれば軍備を整え始めているはず……行って探ってまいれ」

「御意」

命令の言から確かな覇気を感じられて、弥太郎はどこか安堵しながら静かにその頭を下げる。

「行け」

「は」

そして一瞬の風が吹いた後には、もうそこに弥太郎の姿はなかった。ただ1人その場に佇む巴の長い黒髪が風になびく。ざわざわと庭園の木々が葉を揺らした。吹き抜ける風はひやりと涼しく、そこに夏

の名残はもはや見つけれない。

「……………急がねばなりませんね」

悠長に悩む暇など、本当は無かったのだ。この緋山にも直に冬が来る。冷たくなった風に当てられて、山々の葉が静かに色付いていくその前に全てを終わらせなければと巴は小さく息を吐いた。

袴を履き、帯を締め、羽織りを一枚羽織る。ぎゅっと一つに結わえた髪。側仕えの女中が用意した鏡にうつるのは、緋山が誇る“紅姫”その人。

鏡の向こうにうつるその人は、きゅっと桃色の唇を引き結んで“巴”を見つめていた。同一人物であるのに、どうしてこうも違って見えるのだろうかと巴はいつも思う。

むしろ“巴”と“紅姫”は別人なのだと思って過ごしてきた。纏う雰囲気が違うのか。それとも抱く覚悟の質が違うのか。もしかしたら、やはり全くの別人なのか。ふと浮かんだ考えに鏡の外の“巴”が目を瞬けば、鏡の中の“紅姫”もその目を瞬く。それを見た途端に、はっとした。

(……………いいえ、そうじゃない。“巴”も“紅姫”も、同じ“私”なんだわ)

だって、この胸にある守りたいという強い想いはいつも同じだ。

まるで白昼夢から目が覚めたかのようにだった。手を一つ打ち鳴らして、女中を呼ぶ。

「紅を」

そして手元に運ばれてきた紅をほんの少し、小指の先にのせて唇の上を滑らせた。

まるで突然花が咲いたかのように赤く、色づく唇。

鏡の向こうにうつっているはずの“紅姫”が“巴”とかぶって見えた。“紅姫”が見せた事の無い、艶やかな微笑みが鏡にうつる。

さあ、もう覚悟はできた。心の中の迷いも無い。

「……約束は、果たします。必ず」

誰にともなく呟いた言葉に返答は無い。それでも巴は満足げに笑った。まるで大切な誰かからの返答が聞こえたかのように。不意に浮かんだ笑みを消して音も無く立ち上がれば、控えていた女中の手によって滑らかに廊へと続く襖が開かれる。そして静かに彼女は自室を出たのだった。

十約束、了。

十四、二人の男の対談

城内の奥まった場所に位置する一室。そこに昭義はいた。僅かな調度品と生け花が飾られたその部屋に座る彼の前には、この城の城主である緋山忠信が座っている。静かな空間だった。鹿威しの音や野鳥の声の時折響いては、その場をつつむ静寂を引き立てている。

「……して、話とは」

柔らかな声音で話の口火を切ったのは、忠信だった。

「此度の戦の事、城内の噂は真実なのですか」

「……昭義殿、まず貴殿がどのような事を耳にしたのか教えて頂けまいか」

穏やかに微笑む忠信に反して、昭義の表情は険しい。

「巴殿を、紅姫を戦に出すと」

感情のこもらない淡々とした声。しかしその瞳の奥には静かに感情が揺らめいている。

忠信はそれに気付いてか気付かずしてか、その顔に微笑みを浮かべたまま真実だけを端的に告げた。

「そのつもりだ。あれが望んでいるからな」

忠信の言葉に昭義は僅かに目を見開いた。

「巴殿が望んだ？」

「ああ。わざわざ武装して、直談判に来た」

本来ならば城の奥深くで守るつもりであったのに、と忠信は苦笑を漏らす。

『父上、私に出陣の命を下さいます』

あの日、巴は開口一番にそう願った。

華奢な体躯に似合わぬ鎧を身に纏い、美しい黒髪を一つに結い上げた様は見慣れたものであったが、常とは違って、その唇に鮮やかな紅が乗せられていた。姿こそは戦場に立つ『紅姫』でありながら、その一刷毛の紅が城に住まう『巴姫』という存在を強く思わせて、忠信を驚かせたのはまだ記憶に新しい。

『もはや迷いは在りませぬ。覚悟も決まりました。私も、皆と緋山を守りたい……否、守らなければなりません』

そう言つて、巴は微笑ったのだ。

「あれは……、巴は、泣いただろうか？ 昭義殿」

ぽつりと落とされた問い掛け。その内容に、昭義は驚いて忠信を見やった。そして再び瞠目して、目を伏せる。

忠信は酷く穏やかな、まるで仏か何かのような笑みをその顔に浮かべていた。

「……はい」

ただ一言、肯定しか出来ない。

「そうさなあ、泣くよなあ……結局はあれが一番嫌う戦になってしまった」

まるで悔い改めるかのように、ぽつりぽつりと呟く。

「昭義殿、貴殿も国では戦に出ているのだったな？」

「はい。私も父の指揮の元、一人の将として出陣する事の方が多く御座います。自ら戦の指揮に立つようになったのは、ほんの最近の事ですので」

「噂には聞いておるよ。なかなか腕の立つ策士であるようだ」

「いえ。私など、まだまだ若輩者に御座いますれば」

あくまでも殊勝な返答にクツクツと笑いをかみ殺しながら、忠信は昭義を見やる。

「昭義殿、ならば貴殿は戦において守られる立場に立った事はあるまい」

「守られる立場……ですか？」

「左様。男子たるもの、そのような側にはなかなかならぬものだが、どうかね？」

自分の命を守るために、大切な人間に死なれた経験はあるか？

予想だにしない忠信の言葉に、昭義は今度こそ目に見えて動揺を露わにした。

「……それはいつたい、どういう意味です？」

なんとか気持ちを静めて、昭義は冷静に問う。

「……では、質問を変えよう。自身の身代わりとなって、君の大切な人間が君の目の前で死んだ事はあるか？」

柔らかな笑みを浮かべてはいるが、忠信の瞳は真剣そのものであり、昭義は知らず知らずのうちに生唾を飲み込む。

「……ありませぬ」

「そうか」

「この問い掛けに、何の意味が……？」

「さあてね、それを貴殿は知っている上での返答だと思っていたのだが？」

「……巴殿、ですか」

昭義の言葉に、忠信はにまりと笑みを浮かべた。

「それらを知った時、貴殿にも見えるものがあるかも知れぬな」

すう、と静かに襖が閉まった。室内には忠信のみが座っている。

すっかり冷めて冷たくなってしまった湯のみを片手に、小さくため息を吐いて呟いた。

「あの娘が泣いた意味を、迷う理由を、そして決断したその心を……今の昭義殿が真の意味で理解する事は出来ぬ。しかしそれでも巴は、昭義殿の元で泣いた」

それはすなわち、巴が理解してほしいと願い、無意識に助けを求めたのが昭義であったという事を指す。

「……悔しいが、仕様のない事よな」

忠信に、巴は救えない。

全てを知り、理解するからこそ、父であり国主でもある忠信は巴の心に入る事が許されないのだ。……彼もまた、当事者であるが故に。

「願わくばどうか、」

巴に巣くう闇を払うのが、かの男の息子たる昭義であれと忠信は願うのであった。

十二人の男の対談、了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2074i/>

蒼い空、赤い花。

2011年4月6日10時20分発行